

継帝伝異聞録

第一章：辺境

——よ……。

先ほどから、誰かが呼んでいる。

いや、もう、遥か昔からずっと呼ばれ続けている様な気がする。

それが自分に対するものなのか、全くの別人に対するものなのかもわからない。

とりあえずその声に答えようとするが、自らの意思で体を動かす事ができなかった。

体が、異常に重い。

全身が水気を含んだ砂袋の様に、重く、だるく、冷たく、そして、全く力が入らない。

何も見えず、口を動かす事も、声を発する事もできなかった。

ただ一つ、今の自分に許されていたのは、最前から耳元を通り抜ける、誰かが誰かを呼ぶ声を聞く事だけだった。

それが、遥か昔から永遠の長きに渡って続いている。

それはいつから始まり、いつまで続くのだろうか。

この世の始まりから終わりまで、鋼の拘束具に全身を絡めとられた様な状態が続くのだろうか。

そもそも、ここはどこで、なぜここにいるのだろうか。

自分は、いったい何者なのだろうか。

*

この子が川岸に倒れているのを見つけてから、そろそろ一週間が経つ。

“この子”といっても、僕よりは幾つか年上みたい。

一週間前、川へ釣りに出かけた時に、川岸に倒れているのを見つけたんだ。

見つけた時は全身傷だらけで、もしかしたらもう死んでいるのかも……と思ったけど、虫の息だとわかって慌てて家に運んで来た。

とても高い熱に魔されている様だったけど、爺ちゃん特製の薬草の煎じ汁のおかげで熱も下がったし、傷も治って来ている様だった。

でも、まだ目を覚まさない。

家に運んで来てからずっとだ。

その間、この子は爺ちゃんの作った薬しか口にしていない。

このままで大丈夫なんだろうか。

慶太は寝床でぴくりとも動かない女の子の傍らに腰を下ろし、女の子の顔を上から覗き込んだ。

細かい切り傷、擦り傷の跡は未だに残っているが、元々とてもきれいな整った顔立ちである事がよくわかる。

「ちゃんとした格好すれば、どこかの名家のお嬢様にだってみえるね」

自分が連れて来ただけに、慶太はこの子の事が気になって仕方がなかった。

それで、爺ちゃんにはこの子の体に障るから余りこの部屋に立ち入らない様に、ゆっくり休ませてあげる様にとその都度注意されるのだが、慶太はそれでも暇を見つけては女の子の元を訪れていた。

といっても、何をする訳でもなく『大丈夫かなあ』『早く治らないかなあ』と女の子の顔を覗き込んでいるだけなのだが。

慶太、慶太……。

そんな時に限って、必ずと言っていい程爺ちゃんに用事を言いつけられる。

「あー、また爺ちゃんが呼んでるよ。じゃあ、また用事を済ませたら来るからね」

そういつて慶太が女の子のそばを離れようとした瞬間、女の子の瞼が唐突に開いた。

「うっ！」

そういう事態を想定していなかった慶太は、ポカーンと口を半開きのまま思わずのけぞってしまう。

そのまま慌てて叫びながら部屋を駆け出していた。

「爺ちゃん、爺ちゃん、目を覚ましたよ」

昼間でも明かり取りの窓越しにわずかな木漏れ日が差し込むだけの薄暗い部屋に、少女は一人残された。

無言のまま、まだ夢の続きを漂っている様に、ゆっくりと上半身を粗末な寝台から起こし、自らの置かれた状況をまだ理解出来ないと言った風に、ゆっくりと周囲を見回している。

どこにでもある、どちらかと言えばつつましい、何の変哲もない木造家屋だった。

今自分がいる寝台と、傍らにある使い込まれた木製のテーブル、部屋の反対側に何気なく置いてある木箱……それがこの部屋にある調度品の全てだった。

ふと少女は思い立った様に、自分の懐の“それ”があるべき辺りを弄ったが、ある筈の物がそこにはなかった。

とても気になる位なのだから大切な物に違いない筈なのだが、それが一体何なのか思い出す事が出来ない。

次いで、自分が左腕に傷を負っている事、見覚えのない服を来ている事など、微妙に気になる様々な違和感を覚えていた。

「早く早く」

開け放たれたままの部屋の戸口の向こうから、慌てふためいた少年の声と、そんな少年をなだめる老人の声が近づいてくる。

「慶太よ、そう騒がしくするものではない。意識が戻ったと言っても病いが完治した訳ではないのだからな」

慶太と呼ばれた先程の少年に続いて、長い白髭を蓄えた長身の老人が現れた。

身なりは少年と同様、一般的な庶民にありがちな地味な衣服であったが、どこことなく高貴な気品というか、この粗末な家屋の主には似つかわしくない独特の雰囲気漂っていた。

少年と老人は部屋の傍らの簡易寝台の脇に腰を下ろし、老人が寝台で茫然としている少女に話しかけた。

「娘さん、気分はどうかね。腕に痛みはないかな」

少女はその声が聞こえていないかの様に、視点の定まらない視線を薄暗く何も無い壁に漂わせながら、ただただ茫然としていた。

「爺ちゃん、この子、聞こえてないのか？」

「うむ、心ここに非ずという感じだな。とにかく、今はこのままそっとしておいた方がよいだろう。腕の傷ばかりでなく、心にも何か目に見えぬ傷を負っているのかも知れぬ。心の傷というのはな、完治に時間がかかるものなのだよ、慶太」

「心の傷？」

「腕の傷もそうだが、何か衝撃的な体験をしたのかも知れぬ。であれば、周囲が妙な詮索をしても返って本人の負担となるだろう。しばらくは、そっとしておいて上げなさい」

*

老人と少年の去った薄暗い部屋に、少女は一人取り残されていた。

極度の疲労から来るのか、厚い鉛の板を巻き付けた様に全身が重く、力が入らない。

体に力が入らない為か、気分も重く沈み、心の中にぽっかりと空洞が出来た様に、何かを考える気力も湧かなかった。

起きているのか、寝ているのか、もしくは自分が生きているのか死んでいるのかさえ認識出来なかった。

ただ、“それ”の事が気にならない訳ではない。

しかし、今の自分には何を成す力もなく、何かを成し遂げる強靱な意志も無い、ましてや訳の分からない小部屋に半ば監禁状態で、果たして自分に何ができるのか。

そもそも、とても気になっていた筈の“それ”とは、一体なんだったのかさえ、もはや思い出せない。

思い出せないというより、別に“それ”の事などどうでも良くなっていたのかも知れない。

何の力も無い囚われの身のちっぽけな自分が、これから一体何をなすべきだというのだろうか。

何もかもが重苦しく肌にまとわりつく霧に覆い隠されて、このまますべてが曖昧に朽ち果てていく様に感じた。

とにかく、全身に伸しかかる疲労感と脱力感から、一刻も早く解放して欲しい。

*

クッ、クッ、クッ。

嘲る様な嫌らしい笑い声が耳元にこびり付く。

本当は何も考えたくないのに、否が応でも現実に戻す効果抜群の、生理的嫌悪感が骨の髄からわき上がる様な笑い。

声の主の精神的不健康さを象徴する様な笑いだった。

少女にはその笑いに覚えがある様な気がした。

しかし、笑いの主そのものには何の興味も覚えない。

とにかく、その薄気味悪い、全身に悪寒を催す様な笑い声をすぐに止めてもらいたかった。

起きているのか眠っているのかさえ臆げな意識の中では、自ら体を動かしたり、声を上げて笑い声を制しようという気さえ起こらなかった。

「うむ、せっかくわしが逃がしてやったというのに、これはちと重症だのう。ホルホル」

今度は笑い声ではなくて、何事かを喋っている。

「おぬしはその調子では、わしもこの先を考えなくてはならぬかのう。もっとも、おぬしは魅力的な素材であるばかりでなく、色々といい目を見させてもらえると期待しておったのじゃが、少々期待外れかのう。ホルホル」

声の主が言う『おぬし』とは、どうも自分自身の事らしい、とだけは何となく理解出来た。

しかし、それ以外は訳の分からぬ、少女には思い当たる節のない戯言に思えた。

「これ、おぬしもいい加減だんまりは止めて、少しは言葉を返してこぬのか？ わし一人で喋っておるだけでは何とも寂しいのでな」

そのまま、しばらく間があった。

薄暗い屋内が静寂に包まれる。

その間、少女は微塵も動かなかった。

行き場を無くして仕方なくその場に居着いてしまった亡霊の様に、少女は只あてがわれた簡易ベッドの上に横たわったままだった。

しばらくして、とうとう居たたまれなくなったという具合に、笑い声の主が再び少女の耳元で囁いた。

「おぬしの大切な“あれ”の事は気にならぬのか？ ほれ、先程ここにも訪れたであろう、この家主である老人と童。あやつらがおぬしの大切な“あれ”をかすめ取り、どこかに売り払おうとしておるのかも知れぬぞ」

——“あれ”？

確かに正体不明の“あれ”を気にしていたのは事実だ。

しかし、未だに“あれ”が何なのか、全く見当がつかない。

それ以前に自分自身の事も全く分からないのだ。

自分が気にしている“あれ”の事を、笑い声の主は知っていて、笑い声の主も“あれ”の事を気にしているらしい。

という事は、笑い声の主は自分を知っているのではないか？

「そうそう、そうなくてはならぬな。そうとも、わしはおぬしを知っておるとも」
少女の意を汲み取った様に、笑い声の主が答えを返した。

「おぬしには、少しでも早くあの老人と童から“あれ”を奪い返してもらわなくては、わしも居心地が悪いものでな。よいよい。では、これからわしがおぬしの記憶の泉から幾つかのエキスを披露しよう。おぬし自身の素性が明らかになれば、“あれ”の記憶も蘇ろう」
そう言葉を残して、笑い声の主が消えた。

ふと、全身にもたれかかっていた重圧感や疲労感が、嘘の様にみるみる引いていくのを感じていた。

そのまま意識が朦朧となり、少女は気分の趣くままに夢魔の回廊へと足を踏み入れた。

＊

天界を支える八つの峰……蓬莱と呼ばれる山々のうちの一つ、不似（ふじ）と呼ばれる山の麓には、広大な面積の大森林地帯が横臥していた。

かつて、神話時代に天界と下界を分け隔てる原因となった天帝の雷によって、天の神々と人との接触が途絶えて以降、広大な森林地帯が不似の山の麓を覆い尽くし、いつしか無数の猛獣や妖しの類いの住处と化していた。

これらの猛獣や妖しの類いを退けて蓬莱の麓にある祠に辿り着いた者だけが、別名中空界とも呼ばれる蓬莱の山で仙や修行者として生きる事を許され、日々神々の凜気を全身に浴び、神々の奇跡の技を会得する事が出来た。

一度仙や修行者となった者は、自らに課せられた“お努め”を果たす時を除いては滅多に蓬莱山を下りる事はなかったが、稀に、蓬莱山での生活に馴染めずに自ら逃げ出す者、あるいは導師と呼ばれる仙の指導者によって山を追われる者もいた。

お努めとして山を下りる者は、大半が上級の武闘術の会得者か、何らかの神の業を会得した者に限られていた為、森林地帯の猛獣や妖しを退ける力を備えていた。

しかし、蓬莱山での生活に挫折した者の多くは、己の身を守る術もなくこの森で猛獣や妖しの餌食となっていた。

そしてまた、蓬莱山から森林地帯に足を踏み入れる一つの影があった。

名を、明日見（あすみ）という。

蓬莱山の一つ、不似の山の中腹にある『天元堂』という館の一修行者である明日見は、導師から委ねられた使命を果たす為に、蓬莱を降りて下界へと向かう途上であった。

明日見がこの大森林地帯に足を踏み入れて、既に十日を数えていた。

「さすがに“迷いの森”と呼ばれるだけの事はある……三日も歩けば一番辺境の里に辿り着いていてもおかしくはない筈なのに」

最短距離を辿れば、蓬莱山の峰から離れる方向へ歩いて三日程で森林地帯を抜け、何処かの辺境の里に辿り着いていてもおかしくはなかった。

しかし、この森林は全高六丈（約十メートル、一丈二人の平均的な身長：百七十センチ位）にも上る高木の密生する森で、快晴の昼間でも森林内はわずかに木漏れ日が差す程度の薄暗さであった。

その為、一旦森に入れば自らの位置を確認する手段が殆どなく、カンを頼りにひたすら森の中を徘徊するしかなかった。

「まさか、既にこの森自体が“こいつ”の仕業だなんて事……」

明日見がふと左手で懐の突起物を握りしめた。

明日見の懐の小さな革袋におさまっている“それ”は、当然ながら何の反応も示さない。

「導師様にかなり脅されたけど、何だか拍子抜け……それとも、“これ”は人にしか反応を示さないのだろうか」

誰に話すでもなく、無意識のうちに独り言を漏らしながら、明日見はわずかに踏み固められた獣道をひたすら歩き続けた。

しばらく森林地帯を徘徊した明日見には、この森の中で獣道が最も安全を保障してくれる通路だという事を、身を以て思い知らされていた。

過去数千年、もしくは数万年以上に渡って人々の侵入を阻んできたであろうこの森は、根元に大量の枯れ草や腐葉土の層を抱えている。

現在でこそ無数に屹立する高木の群れに日射を遮られて、下生えにもろくな植物が生育していなかったが、この木々も一年に一度は葉を落とす。

落ちた葉は木々の根元に堆積し、微生物に分解されて再び木々の養分となる。

また、葉の落ちる季節は森の下草が繁茂する時期でもあった。

葉の落ちる寒い時期とはいっても、雪に閉ざされたり氷が張る事のない、比較的温暖なこの地においては、木々の葉が落ちて地表にまで日光が注ぎ、また枯れ葉が腐葉土となって適度に堆積したその時期は、雑草が唯一生育を許された時期でもあった。

木々の葉が落ちてしばらく立つと、名も知らぬ雑草が一斉に芽吹き、瞬く間に淡い緑で地表を覆い尽くす。

大抵が一丈（百七十センチ）程に育つ。種類によっては二丈（三百四十センチ）にも達する草さえある。

葉の落ちる季節は森に日差しをもたらすが、反面人の背丈大の雑草が視界を奪い、人の行く手を阻むのだった。

その為、この森を越えるのに最も良い季節は、木々の葉が落ちてまだ下草が芽吹いていないわずかな期間とされている。

その次が最も日の高い季節、ちょうど今頃の事だ。

木々の葉が大量に生い茂っているとは言え、日の出ている間は地表にも多少の木漏れ日が注ぐ。

日が落ちれば無明の闇に閉ざされるのだから、少しでも日の注ぐ時間の長い方が、この猛獣と妖しの森を踏破するには都合が良かった。

無明の森を徘徊する事は自殺行為だと、既に明日見は自らの体験を通して確認していたからだ。

この森に入った初日、明日見は一刻も早くこの森を抜ける為に、夜間も松明をかざして進むつもりだった。

しかし、松明の明かりだけでは、無明の闇に十分な視界を与えるにはいささか役不足だった。

呆気無く道を踏み外し、踏み固められていない腐葉土に覆い隠された穴に足を取られて転倒した。

その瞬間に松明を手放してしまった明日見を目がけて、何者かがいきなり襲いかかったのだ。

闇の固まりにしか見えなかったその第一撃を右手で払いのけ、明日見は二尺（長さの単位：一丈＝六尺、約四十三センチ）程の深さの穴から立ち上がった。

瞬間的にまだ明かりを失っていない松明の位置を確認すると、闇の第二撃を交わしながら松明に飛びつき、闇の正体に向けて松明の明かりをかざした。

闇の正体は野犬だった。

犬は明日見が掲げた松明の明かりに怖じ気づき、再び闇の中に消えていった。

その時、無明の闇と化した夜の森を踏破する事の愚を、明日見は己の身を以て悟ったのだ。

それ以来、明日見は昼間のみ森を歩き、踏み固められた獣道以外にはなるべく立ち入らず、夜は早めに火をおこし、夜が明けるまでは火が絶える事のない様に気をつけた。

しかし、森に入って十日、明日見はこのまま獣道を行く事に疑問を感じ始めていた。

「確かに獣道を外れる事は危険だけれど、獣道が森の外に通じていなければ、獣道を辿る意味がない」

いずれにしても、今自分のいる場所を知りたい……明日見は天元堂で十年間も修行の日々を送りながら、神の業を何一つ会得していない自分に後悔した。

「こんな事なら、もっと早くから導師様のいう様に修行に励んでおくのだった……せめて、天眼通でも修得していれば」

天眼通とは、千里（約五千キロ）も離れた場所の事象を居ながらにして目撃する事ができるといふ、神の業の一つである。

天眼通を会得すれば、どちらの方向に何があるのか、どのような事件が起こっているのかを、術者の思いのままに見通す事ができるのだ。

しかし、体を動かす武闘術にしか興味を示さなかった明日見には、神の業を会得する絶好の機会を与えられていながら、それを活かす事ができなかったのだと、今更ながらに己の愚を悟った。

それは、今から後悔してもどうにかなるものではなかった。

今さら後悔しても、それで明日見が天眼通を会得できるわけではないのだ。

天眼通が駄目なら、別の方法を考えるしかない。

明日見は目の前の高木を見上げた。

様々な太さの木が聳えていたが、それらの木々は明日見の頭の遥か上で大きく枝を伸ばし、互いに重なりあっている様に見えた。

ある程度の高さまで上れば、枝伝いに他の木に移動する事も不可能ではないだろう。

枝伝いに、その一帯で最も高い木に取り付けば、現在位置や、これから進むべき方向の手がかりを与えてくれるかも知れない。

「不似の山さえ見えれば、その反対側を目指せば良いのだから」

明日見の行動は素早かった。

周囲の手ごろな太さの高木に手をかけると、慣れた腕さばき、足さばきでするすると木の中腹まで一気に登り、明日見の足首程もある枝の付け根に足をかけ、今度は隣の木と重なり合う枝の状態を見極めた。

枝から枝へと伝い、その一帯でより高い木に移っては上に登る作業を繰り返した。

しかし、不似の山で日々の鍛錬を放棄しては天元堂を脱走し、麓近くで適当な高さの木に登り居眠りに耽る……そんな生活を長年送っていた明日見にとって、木登りは呼吸する程呆気なく容易い作業だった。

程なく一帯で最も高い木に取り付き、そのまま頂点近くまで登り詰める。

「見えた！」

最も美しい稜線を構えると言われる不似の山は、しかしその中腹辺りから上は厚い雲に覆われていて、ありのままの姿を明日見に見せる事はなかった。

目測ではあるが、不似の山から、既に相当離れている事がわかった。

最低でも二十里（約百キロ）以上、約三十里は離れている様に明日見には見えた。

最も、不似の山をこれ程離れた所から眺めた記憶は、明日見には残されていなかったから、本当はもっと離れているのかも知れないし、もう少し近いかも知れなかった。

不似の山の反対側を振り向くと、既に森の外れ近くに到達している事がわかった。

シミの様にも見える里らしき建造物の固まりまではまだ相当な距離があったが、森の切れ間から里の方に向かって川らしき大きなうねりが横たわっている。

とりあえずあの川に辿り着いて、川沿いに里へ向かう、それが、最も無難な道のりに思えた。

もう一度不似の山が横たわる方向を振り返り、十年に渡る天元堂での生活を振り返る。

「導師様、みんな……」

ふと、明日見は、隣に聳える少々丈の低い木の枝の付け根付近に、鳥のヒナが親を、もしくは餌を求めて可愛らしい鳴き声を上げている事に気づいた。

「こんなところに鳥の巣があるんだ……」

明日見が巣を覗き込むと、ヒナは一瞬鳴き止んで首を傾げ、催促するかの様に更に激しく鳴いた。

鳥のヒナといっても、一般的な鳥のヒナに比べてかなり大きく感じた。

鳴き声や仕草だけを見れば鳥のヒナそのものだが、毛を膨らませれば巢からこぼれ落ちそうな巨体や、小鳥なら丸呑みしてしまいそうな程大きく開くクチバシは、鳥のヒナには余りに似つかわしくなかった。

まさか！

明日見の脳裏に一瞬浮かんだ不安を払いのける様に天を仰いだ瞬間、それは既に明日見を捉えるべく急降下の最中だった。

猛禽……明日見にとって馴染み深い小鳥との余りの違いに、鳥と一言で片付けてしまう事は憚られた。

鷲の一種だろうか、鉤の様に凶太く歪んだ嘴と、鎌の様に丸く変形した足爪を立てて明日見の頭上に迫った。

明日見はとっさに頭部を両腕で覆い、受け身の姿勢をとった。

猛禽が巨大な翼で羽ばたき、明日見の耳元をつんざく風圧が襲った。

猛禽が舞い上がった……明日見が青空の中に姿を小さくする猛禽の姿を認めた時、体がバランスを崩して木々の小枝の谷間に放り出された。

*

誰？

明日見は何者かの気配を感じていた。

それはあからさまな殺気を放っている訳ではなかったが、明日見にとっては忌むべき存在である事を本能的に察知していた。

明日見が周囲の気配に警戒しつつゆっくりと瞼を開くと、一面を漆黒の闇が覆っていた。

徐々に感覚を取り戻すとともに、左腕が妙に熱を帯びている事が感じられた。

周囲に警戒しつつ、右手で熱を帯びた部分に触れてみる。

痛！

脳天を突き抜ける強烈な痛みが左腕を駆け抜け、明日見は反射的に右手を引っ込めた。

それから木に登った事、猛禽に襲われかけた事、そして木の上から投げ出された事を思い出した。

「あの鳥に、襲われたんだ」

この森は木々の根方に大量の腐葉土が堆積している。

その腐葉土がクッションとなって、明日見を落下の衝撃から守ってくれたのだろう。

明日見はもう一度、左腕の患部と思われる熱を帯びた部分に、今度は細心の注意をはかりながらゆっくりと触れてみる。

痛みはあるが、患部は既に血液が凝固した様子がさついていた。

それ程傷は深くはないようだ。

という事は、樹上から落下してからかなりの時間が経過しているのだろうか。

少なくとも、闇の濃さからして深夜である事は明日見にも想像がついた。

手探りで荷物の在処を探すが、これまで肌身離さずにいた荷物一式は紛失していた。
このままでは、夜間に跋扈する獣を退ける為に火を熾す事もままならない。

クッ、クッ。

何者かの嘲笑の様な、低いくぐもった声が明日見の耳元に響いた。

誰？

確かに、誰かがすぐそばにいる。

しかし、それは獣の類いとは少々趣きが異なっていた。

殺気は感じられないが、もっと禍々しくおどろおどろしい気配を放っているのだ。

呪いの媒介者と言われる伝説の赤鬼に、背中から覆いかぶさられている様な嫌な雰囲気だった。

明日見が眉根に皺を寄せ、みるみる険しい表情に変わっていった。

意識を集中して、すぐそばに存在する筈の何者かの一挙手一投足をも見逃すまいとする。

「おいおい、そんなに怖い顔をしなくてもよいだろうに」

今度ははっきりと人の声が耳に届いた。

「誰！」

明日見も今度は声を発し、未だに姿を見せぬ何者かの反応に備えて身構えた。

「わしか？ わしは、わしだ。それよりも、その険しい顔をなんとかせぬか」

唐突に明日見の目の前に朧げな炎が浮かび、その中に揺らめく人の顔の様な物が見えた。

「物の怪、お前の様な妖しの者に騙されるものか！」

明日見が一喝した。

この森で獣とともに警戒しなくてはならないのが、このような物の怪の類いだった。

物の怪は夜間に現れては人を惑わし、陥れてやがては死に導くと言う恐ろしい存在だった。

しかも、獣と違って肉の体を持たないという所が余計に物の怪の怪しさを際立たせていた。

しかし、明日見の眼前に現れた物の怪は、一般的に認知されている物の怪とは少々趣きが違う様に思われた。

まるでとぼけた好々爺の様な口調が、物の怪らしい恐ろしさを和らげる反面、詐欺師独特の如何わしさを漂わせていた。

「まあ、そういきり立つなというに……しかし、わしのこの姿を見ればそのような反応も当然なのかのう、ホルホル」

「そのふざけた物言いをやめろ、物の怪！」

「だから、物の怪でないというに、おぬしはそうやって勝手に決めつけて思い込む悪い癖があるぞよ。このご時世、何でも疑ってかかるというのも処世術ではあろうが、人の言葉に耳を傾けるという寛容さも持ち合わせなくてはならぬな」

「物の怪風情が何を言うか。即刻この場を立ち去れ」

明日見が印を結び、悪霊退散の呪文を唱え始めた。

不似の山の天元堂では、明日見は主に武闘術の習得に励んでいたが、初歩的な呪術についての心得も学んでいた。

とはいえ、実践的な使用はこれが初めてといっても良かった。

「先ほどから物の怪ではないと言っておろうが、聞き分けのない女子じゃの。そのような無駄な試みは諦めて、まずはわしの言葉に耳を傾ける事じゃ。天元堂の修行者明日見よ」

明日見よ……と問いかけられて、明日見は虚を突かれたように印を解いた。

自分の名前を知っている物の怪など、明日見は聞いた事がなかった。

この物の怪はどこかが違う……そう感じて反射的に印を解いたのだ。

「お前は、私の事を知っているのか？」

「ああ、もちろん、よく知っているとも。わしは何を隠そう、この森で立ち往生しているおぬしを見るに見かねて、手を差し伸べに来たのだからな。ホルホル」

「その、気持ち悪い“ホルホル”という笑い声をやめろ」

「それはわしの癖じゃからな、ホルホル。ともかく、多少はわしの言葉に耳を傾ける寛容さを学ぶ心得がある様じゃの。感心感心」

「別に、お前の様な物の怪の言葉を聞く耳は持っていない。ただ、物の怪にしては妙な奴だから、正体を見極めようとしているだけだ」

「まあ、よい。おぬしがこの様な所で立ち往生しておらなければ、わしが出てくる必要もないのだが、今それを言ってもわかるまい。物事の道理を理解してからでも、せいぜい感謝してもらおう事にするかの。ホルホル」

明日見は物の怪に返す言葉が思い浮かばなかった。

確かに自分が森の中に迷い込んで、延々と森の中で時間を潰していた事は事実なのだ。

しかし、物の怪の様な妖しの者の言葉を素直に受け入れる程お人好しでもなかった。

木に登った事である程度の位置関係がわかったとはいえ、木から転落したまま深夜を迎えてしまった事で、再び方向感覚が全くわからなくなってしまった。

左腕に負ってしまった傷の為に、明日もう一度木登りに挑戦する事も難しいかも知れない。

確かに物の怪の言う様に手詰まりと言っても良かった。

物の怪の罠である可能性は常に疑ってかからなくてはならないとしても、この場合は物の怪の言に乗る事で開ける道もあるかも知れない。

「物の怪よ。確かに私は道に迷っている。お前は普通の物の怪ではないようだし、私の事も知っている様だ。ただ、私はお前がただの物の怪だという疑いも持っている。お前が物の怪でなく、ここで立ち往生している私を導く為に現れたと言うならば、私にそれを信じさせて欲しい。私の事を良く知っているのなら、私を信じさせる事もできるだろう」

物の怪は静かに笑っている風だった。

「信じさせる？ それは無駄な事じゃ。それにわしの言葉に耳を傾けたとして、それが誤りならばおぬしはわしを責めればすべて事が収まるとでも考えておるのか。わしの言葉が真実であろうとなかろうと、すべてはおぬしが選択するのだし、その責めを負うのはすべて

おぬしのじゃよ。わしは道に迷った子羊を哀れんで抜け道を教えに来た気まぐれの爺に過ぎぬ。そのわしにオオカミに襲われない様に頼むのは、些か過大な要求とは思わぬか」

しばらく、お互いがにらみ合ったまま、辺りを沈黙が漂った。

「ほれ、おぬしの荷物はそこじゃ」

明日見の立ち位置から三丈（約五メートル）離れた辺りの高木の根方が仄かな明かりに照らされ、木から落ちた時に見失った布袋が浮き出していた。

明日見は訝しげな表情を浮かべつつ慎重に明かりに近づき、荷物を回収する。

しかし、そのまま更に沈黙の時間が流れる。

「まあよい、おぬしがこの森を抜きたいのならわしについてくるがよい」

半ば焦れた様にいうと、物の怪はフワフワと風に漂う綿帽子の様に漆黒の闇の中を進み始めた。

明日見は一瞬躊躇したが、思い直して物の怪の後を追う事にした。

物の怪は音もなく整然と、怪しげな光を放ちながら空間を漂っている。

一応明日見が後をついてくる事を考慮して、闇の中に立ちふさがる木々を避けているようだった。

おかげで、明日見は物の怪の通る道筋をそのまま辿れば良かった。

物の怪は本来肉の体を持たない者とされているのだが、この物の怪は肉の体を持っているとでもいうのだろうか。

明日見はそのような事を思い巡らせながら、足下に細心の注意を払いつつ進んだ。

そのまま一時間も無言のまま歩き続けると、ふと物の怪の動きが止まった。

「明日見よ。招かれざる客が近づいておる。また時が合えばその時に見えようぞ」

そういい残すと、物の怪は闇にとけ込む様に消えていった。

招かれざる客？

明日見は不穏な空気を察して身近な木の幹に背を当てると、本能的に身構えて闇に目を凝らした。

静寂に包まれた闇に微かに地を蹴る音が伝わり、血に飢えた獣の気配が明日見に襲いかかった。

野犬！

獣は闇の塊となって身構える明日見に突っ込んでいった。

野犬は唸り声を上げて明日見に襲いかかり、怪我を負った左腕に牙を突き立てた。

痛！

明日見は左腕の痛みに顔を歪め、とっさに野犬の顔面目がけて右の拳を叩き込んだ。

野犬が悲鳴を上げて左腕の牙を離す。

一旦距離を置いて、体制を立て直してから再び襲いかかる気だ。

明日見は野犬との間合いを計りつつ、じりじりと左へ、左へと動いた。

闇に包まれて視界の効かない明日見の目にも、微かに左手側に木々の聳えていない空間が見えたのだ。

野犬の隙を見て、走る。

明日見は野犬を出し抜くタイミングを計っていた。

野犬は明らかに明日見の負傷した左腕を狙っていた。

多分血の臭いに吸い寄せられるのだろう。

明日見は再び負傷して半ば感覚が麻痺している左腕を咥に、野犬の攻撃を待ち構えた。

瞬間、大きな闇の塊が明日見に襲いかかった。

明日見はすかさず闇の主に渾身の右足を叩き込み、同時に微かな空間のある左側へ走り出した。

途端に明日見の足下から地面が消えた。

何！

音もなく、明日見は闇の空間に吸い込まれる様にして消えていった。

*

はっ！

少女は鞭で打たれた様に起き上がった。

「いつの間に眠り込んだんだろう……」

薄暗い屋内を見回すが、何の飾り気も無い薄汚れた壁が、無造作に立ちすくんでいるだけで、他に気になる様なものは何も無かった。

あの笑い声の主の気配も感じなかった。

それにしても、あのリアリティのこもった夢。

森の中を旅する少女、明日見。

自分の名前は、明日見なのだろうか。

厚く暗いもやに覆い隠されて曖昧としていた少女の記憶が、僅かに差し込む光明に映し出されてかすかな輪郭を帯び始めた。

*

「本日は早朝からお越しいただき、感謝致します」

「何をおっしゃいます、恩師。それに、今日中にはまた発掘現場に戻りたいので、この様な時間になってしまって申し訳ありません」

「わたしの方は、今は只の楽隠居に過ぎませぬ。それに、老いると朝が早くなるものだという事をつくづく実感している昨今ですから、返って都合がよいのです」

「そういつて頂けると多少は気が休まります。では、早速ですが時間に限りがありますので、本題に移りましょうか」

では……老人が席を立ち、背中越しにある棚の小物入れから、使い込まれている小さな革袋を取り出した。

そのまま無造作に粗末な食卓の真ん中に置く。

「とりあえず、ご覧いただきましょう」

老人の向かいに座る学者肌の若い男が、少々緊張した面持ちで革袋を手にする。

中に入っていたのは、何の変哲も無い石だった。

ただし、手にした時にずしりとした異様な重圧感があり、単なる石ころとは少々違う趣きを持っているのも事実だった。

「先生、これは？」

「やはり、感じますかな」

「ええ、ただならぬものを感じますね。とてつもない重圧感と言うか、こう、気圧されるものを……」

「あなたは、これを何と見ます？ 逍隆（しょうりゅう）先生」

「先生などと、勘弁して下さい、代峰（たいほう）先生。で、先生はこれを何だと？」

「わたしの個人的な見解では、かの伝説の奇石の可能性を疑っております。とはいえ、かの奇石についてはわたしもいにしへの伝説を通して僅かに知る程度。何しろわたしの専門は近代史でしたからな。しかし、その点逍隆先生は古代史や民俗学の方面で、最近はかなり活躍されている様ですから、一度見解を伺いたいと考えた次第」

「なるほど。しかし、この石はどのようにして入手されたので？」

「実は、一週間程前に、我が家の悪童が少女を連れて参りましてな、賊か獣にでも襲われた様に全身傷だらけのまま近くの川原に倒れていたらしいのですが、その娘の持ち物だったのです」

「悪童？ ああ、確か、慶太君……でしたか。遠縁の息子さんだとか。で、その娘さんの看病が何かをされているという事ですか」

「まあ、そういう事ですな。確か、かの奇石にまつわる幾つかの伝説には、奇石を扱えるのは類い稀な能力の持ち主、そして奇石を持つ者が英雄として歴史に名を留める時代は、いずれも乱世。つまり乱世を鎮める皇帝を支える英雄に、奇石の持ち主が多いと記憶しております。もし、これがかの奇石ならば、わたしは大変な運命の奔流に巻き込まれたやも知れませぬ。これでもかつては国立学術院の一員として、国家の発展の為の学問に一生を捧げた身ゆえ、このまま看過する訳には行きませぬからな」

「なるほど。私も先生の門下生として国立学術院を卒業して以来、幾つかの古代遺跡の発掘にも携わり、また世界各地の様々な民族の珍しい風習や歴史、神話、伝説、伝承についても調べて参りました。しかし残念ながら、かの奇石に関する伝説も実際の所、はっきり奇石の存在を証明する根拠……ははっきり申し上げれば、これまでに発掘された古代遺跡から、奇石が発見された事はありません。ですから、実は奇石そのものに何らかの力があるのではなく、英雄の神秘性を強調する為に奇石が道具として使われたのではないかと、最近はお考えしております」

「奇石は発掘されていないと？」

「ええ、英雄と奇石にまつわる伝説は数えてみればかなりありますから、これまで発掘された古代遺跡から、一つや二つ奇石が見つかって良さそうなものですが、それらしき物は皆無です。もちろん、今後発掘される可能性は否定しませんが。それから、北方の小部族で輪族（わぞく）という部族がいるのですが、その部族の伝承が、かの奇石と関係がありましてね」

「ほう、興味深いですね」

「かいつまんで説明しますと、千六百年程前に乱世を鎮めた衛帝に従う十勇士のうち、五名が奇石を持つ英雄だったのだそうですが、そのうちの千騎將軍豪天（ごうてん）が、衛（えい）帝暦十二年に権力闘争に敗れて下野し、追手を逃れて隠棲したのが輪族の居住地であり、輪族の祖は豪天なのだとか。衛帝帝記にその事件は記されておきませんので、事の実偽は不明です。それで、現在の輪族は皆首から石を下げていますが、『英雄豪天の奇石の力にあやかる為』なのだそうです。しかし、その部族にも奇石そのものは伝わっておりませんでした。他にも特別な聖別を施した宝石をお守り代わりに身につける部族もありますし、この手の伝承は珍しくありません。ですから、逆に、もともと石や宝石をお守り代わりに身につける習慣を持っていた人物がたまたま英雄になって、石や宝石の神秘性は後に英雄譚が語り継がれる中で付加されていったとも考えられます」

「なるほど、逍隆先生の見解では、この石が奇石だとは特定出来ないという事ですね？」

「はい。確かに引きつけられるものを感じる石ではありますが、それだけで奇石とするには根拠が薄弱かと。又、奇石の驚異的な力に関わるもう一つの伝承として、稀に奇石を手にするべきでない人物が手に入れてしまった場合、その者の人生が大きく狂わされてしまうと言ったケースも見られます。そういう例が帝記やら伝承として伝えられる事は珍しいのですが、私が確認した限りでは一例、かの誉れ高き名君、霊（れい）帝に使えた軍師にして宰相の庶浪（しょうろう）晩年の逸話として語られておきます。霊帝に暇乞いをして首都近郊の片田舎に隠棲していた庶浪が賊に襲われ、その時に奇石が奪われたのとか。しかし、その直後に賊は通りがかりの庶民七名を相次いで惨殺した挙句、廃人同様となって最後には自らの心臓にも刃を突き立てて死んだとあります。ただし、それは異聞として後世に付記された可能性がある為、学会では正式な帝記の一文としては数えられておきません。しかし、仮に奇石が強大な力を秘めているとすれば、良きにしろ悪きにしろ持ち主に何らかの影響を及ぼすと考えるのは突飛な発想ではありません」

「うむ、それで、逍隆先生はこの石をどのように扱うべきだと？」

「どのように、という言葉の意味を図りかねますが、純粹に『この石がかの奇石かどうかを確認したい』という事であれば、私よりも学術院の専門教授に見ていただいた方が、より確実な見解を得られるでしょう。それから、最近は学術院でも物性学という学問に力を入れておきます。代峰先生が現役でおられた頃には余り取り組まれてはいなかった様ですが、要は様々な物質の構造と特性を解き明かす学問です。私には畑違いで、詳しい所までは分かりませんが、物性学の見地からその石を分析すれば、只の石ころに過ぎないのか、それとも何か特殊な構造なり性質を持った石なのかが分かるかも知れません。

実は、最近では遺跡の発掘品も物性学的な分析をする場面が増えておりまして、ある程度の年代特定くらいは出来る様になっていますから、私の専門分野ともまるで無関係とは言えなくなって来ています。」

「物性学……名前を聞いた事がありますが、その分析にはかなり手間がかかるのでは？」

「はい、発掘品の年代特定に一月から二月、奇石の分析という事でしたら、その程度では済まないかも知れません。ただ、この石そのものが無くても、一部の欠片さえあれば分析は可能の様です」

「一月から二月……あの娘と話す必要があるだろう。その上で了承を取り付ければ分析を依頼する事も可能だろうが、拒否されれば無理にという訳にもいくまい」

「できれば、私もその娘の話を聞いてみたいのですが？」

「うむ、今すぐという訳には……慶太が連れて来て以来、煎じ薬くらいしか受け付けぬ体なのでな。病状は快方に向かっているものの、もうしばらく時間がかかるだろう」

「それは残念です。私も奇石には興味がありますから、是非先生には娘を説き伏せていただきたいものです」

「うむ」

若い逍隆先生は、要件を終えたとばかりに立ち上がり、一方テーブルに腰を下ろしたままでも思案気な、今や隠居の代峰先生に軽く会釈した後、ふと何かを思い出したかの様に言葉を継いだ。

「それから、先程の『この石をどの様に扱うべきか』についてのもう一つの見解ですが、もし先生がこの石や、持ち主の娘に何らかの懸念を感じておられる様でしたら、元老院議長にご相談されてはいかがでしょうか。あの方でしたら何らかの方策を検討していただけるかも知れません。とはいっても、当面は治安部隊の監視下に置く程度しか出来ないでしょうが」

*

かつての門下生であった逍隆先生を見送った後、代峰老師は独り物想いに耽っていた。

逍隆先生に一旦は話そうとしたが、余りに恐れ多い気がして言葉を飲み込んでしまった事がある。

それは、今から五十年以上前、帝政の最後を飾るには余りに情けない、歴代一の愚帝と言われた短い李（り）朝の末期、代峰老師は世を乱す愚帝の蛮行とは全く関わりのない健やかな少年時代を過ごしていた。

少年時代の代峰の無二の親友が、李朝唯一の英雄と呼ばれ、暗愚な皇帝を諫めつつ李朝の延命に必死だった千騎將軍豪升（ごうしょう）の長子、豪寵（ごうちょう）だった。

ある日、代峰がこのところ熱中している『歴代の帝王（正史である帝記を、子供でも読みやすい様に物語風の読み下し文にした書物）』について豪寵に語っていた。

豪寵は自分自身が英雄豪升の息子だった為、代峰の熱中度に比べれば実に冷めたものであったが、『こんなにすごい英雄がいた、あの英雄はこんなに不思議な体験をした』と恍惚と

した表情で矢継ぎ早に捲し立てる代峰の様子を眺めるのは、豪寵に取って楽しみの一つだった。

そして、いつもの様に代峰が饒舌に歴代の帝王や英雄の物語を語っている時、ふと『ねえ、この英雄達が持っている雷石っていう不思議な石があるでしょ？ 一度でいいから見てみたいよね』といったのが事の始まりだった。

『その石かどうかは分からないけど、親父もそういう石を持ってるよ？』意外な豪寵の返事だった。

『えっ？』代峰がもう一度聞き返す。

『本当に不思議な力があるのか分からないけど、親父がお守りの様に大切にしている石なら知ってるよ。普通の石だと思ってたけど』と、あっけらかんと返す豪寵。

結局、豪寵が代峰に石を見せる事になった。

といっても、父親が簡単に石を貸してくれる筈がない事をよく知っている豪寵は、父親の目を盗んで拝借して来てくれるのだと言う。

豪升将軍は神をも恐れぬ鋼の心臓の持ち主として知られていたが、鋼の心臓の息子もやはり特別製の鋼の心臓の持ち主らしい。

豪寵に取っては石などどうでも良かったが、代峰が石を見た時の反応を想像するだけで興味深かったし、何よりも石を拝借する行為自体がちょっとしたスリルだった。

三日後、石をこっそり拝借した豪寵が、代峰の寝しなに自宅を尋ねて来た。

李朝末期は治安もかなり悪化していたから、子供が深夜に一人で外を出歩くのは非常に危険な行為だった。

人身売買が横行し、奴隷商人や売春宿に売られても仕方の無い状況である。

そんな中を、わざわざ貴重な石を持ち歩く豪寵に取っては、これもちょっとしたスリルを感じる遊びの一つに過ぎない。

最後の英雄の長子であるため、年若くても武術に関する基礎的な鍛錬は積んでおり、町のヤクザ者程度は返り討ちに出来る自信があるからこそその大胆な行動であった。

豪寵が懐から小さな革袋を取り出し、その中から小さな石を掴んで代峰の手のひらにそっと載せた。

石はどこことなくひんやりして、その大きさの割にはずっしりと重く感じた。

その時、代峰は初めて「将来はこの石を手にする事が出来る様な、豪升将軍の様な英雄になるか、世界中の宝物を探索して回る探険士（たんけんし）になろう」と密かに誓った。

それから五十年余りが経ち、武術に適性の無い事を悟った代峰は、自分が奇石を手に入れるのではなくて、奇石と奇石を手にした英雄の軌跡を辿る学究の徒の道を歩んだ。

しかし、老いさらばえて現役を退いた今となってもなお、あの時に手にした豪升将軍の不思議な奇石の感触が忘れられずに、年甲斐も無く人知れず心躍らせる代峰老師であった。

もちろん、今でも鮮明に思い出せる豪升将軍の不思議な奇石と、少女が持っていた石が瓜二つと言ってよい印象を代峰老師に与えた事は言うまでもない。

＊

薄暗い小部屋の扉が久しぶりに開いた。

慶太は最初恐る恐る室内の雰囲気を探る様に見回し、一息つくと余り足音を立てない様に気を使いながら、少女の横たわる簡易ベッドに近づいた。

「具合はどう？」

そして心配そうな表情を浮かべながら少女の顔を覗き込もうとした刹那、少女がバネの様に布団ごと飛び上がった。

一瞬何が起こったのか訳が分からぬまま面食らっている慶太の手首を少女が掴み、そのまま難なく後ろ手にひねり上げた。

「いてて！ 一体どうしたって言うんだよ！」

半べそ気味に悲鳴を上げる慶太の反応にはおかまいなく、更に腕を後ろ手にきつくひねり上げる。

「私の荷物はどこ？ 早く言いなさい」

少女は慶太の背後から耳元に素早く最低限の言葉を発した。

「荷物？ きっと爺ちゃんが預かってるんだよ。痛いから早く離してよ！」

慶太の額に脂汗が浮き出し始めていた。

少女は殆ど遠慮なく慶太の腕をひねり上げているので、このまま少しでも余計に力を加えれば、慶太の腕は骨折しかねない状況だった。

しかし、少女に取っては、慶太の腕よりも自分の荷物の所在の方が遥かに重要なのだ。

「このまま腕をへし折られたくなかったら、さっさと案内しなさい」

「わかったから、少し腕を緩めてよ」

少女は容赦しなかった。

これ以上何を言っても無理と悟った慶太は、あり得ない方向にひん曲げられて悲鳴を上げる腕の痛みに顔を歪めながら、そろそろと歩き始めた。

少女はまるで慶太を盾にするかの様に、慶太の背後に続く。

慶太は相変わらず背中でひん曲げられている腕を気にしつつそろそろと歩いていたが、薄暗い小部屋から屋外へ出た途端に、ひん曲げられた腕が更に後ろ側に引っ張られ、また軽く悲鳴を上げて足を止めた。

長期間薄暗い部屋に軟禁状態にあった為に、頭上から容赦なく降り注ぐ太陽光に視覚が反応しきれず、少女は一瞬目眩に似た感覚を覚えて足を止めたのだ。

しばしそのままの体勢で視覚が慣れるのを待ち、少女は背後から慶太の耳元に短く告げた。

「さあ、行きなさい」

慶太は無言で応じ、小部屋に併設されている母屋の扉の前まで来た。

慶太は片足で扉を蹴飛ばしながら、中にいると思われる老人に向かって半泣きで喚く。

「おい、爺ちゃん！ さっさと開けてくれ！」

しばし間を置いて開けられた扉の前で半泣き顔の慶太と、背後で歯を食いしばる夜叉の表情をした少女を見て、老人は瞬時に只ならない事態にある事を察知した。

「これは一体……」

「私の荷物を早く返しなさい」

老人の言葉を遮る様に、少女は手短に要求を告げた。

「爺ちゃん、早く渡してやってよ」

慶太のわめき声が更に追い討ちをかける。

老人は一瞬思案気に瞼を閉じたが、意を決したかの様に少女を見据えると、毅然として言い放った。

「荷物はすぐにも返却しよう。しかし、その前に慶太の腕を放しなさい」

「荷物が先だ」

少女も譲らない。

しかし、老人は全く動じる素振りも見せずに平然と告げた。

「武術に心得がある様に見受けるが、その武術で慶太とわたしを殺めてから荷物を取り返すかね？ この国は全て法によって治められている。その手でわたしや慶太を殺めれば、治安部隊が犯人をどこまでも追いかけるだろう。今ここで私たちを殺めて、続く一生を犯罪者として治安部隊に追われる人生を選ぶか、すぐにその手を離して平和的に荷物を手にするか、好きな方を選びなさい。ただし、慶太は荷物の在処を知らないし、わたしも暴力に屈して荷物の在処を明かす気はない。さあ、どちらを選ぶのかね？」

突然老人が放った意外な言葉に慶太は顔を引きつらせ、少女は戸惑いの表情を見せた。

そのままふと腕の力を緩めると、少女は魂が抜けた様にそのまま地面にへたり込んだ。

久方ぶりに解放されて鈍痛の残る腕をさすりながら、慶太が老人の背後に隠れる様に潜り込む。

「ごめんなさい……わたし」

戸口にしゃがみながら悄然とうわ言の様に謝罪の言葉を繰り返す少女に、老人は最前と打って変わって優しく語りかける。

「その様な所にはいないで、とりあえず中に入りなさい。すぐに荷物を用意しよう」

少女は死線を彷徨う敗残兵の様に、力なくよろよろと立ち上がると、これまでとは打って変わって別人の様に、老人に促されるまま素直に室内へ入った。

屋内は少女の寝ていた小部屋の倍くらいの広さはあったが、やはり粗末な作りである事に変わりはない。

中央に四人掛けの食卓があり、簡単な調理場があり、整理棚が一つあり、その他には何も無い、飾り気の無い部屋。

少女は促されるままに食卓の椅子に腰を下ろした。

「もうすぐ昼時だが、ちょうど一息入れようと思って茶を入れた所だ。これを飲んで、少し気分を落ち着けなさい」

差し出される湯のみ茶碗を機械的に掴み、無造作に口の中に流し込んでゆく。

口腔内でふわりと立ち上った茶の仄かな香りが鼻孔へ抜け、これまで頑強に外部からの侵入を阻んで来た少女の心の殻が、見る間に弛緩し流れ落ちてゆくのを感した。

熱い茶の湯が食道から空の胃の腑へ流し込まれるに従い、自分が今まで水分に飢えており、熱い茶の湯が全身に染み渡って気分が落ち着いてゆくのを感した。

老人は先程仕舞ったばかりの革袋を整理棚にある小物入れから取り出し、また小物入れの隣に置かれている脇差し、そして少女が抱えていた布袋、少女が運び込まれた時に着用していた衣服など、全ての荷物を揃えて食卓の上に置いた。

「多分、荷物はこれで全部だろう。一応中身は確認させてもらったよ」

少女はまず小さな革袋を懷に戻し、布袋の中身を確認してから、少し古惚けてはいるが大層豪華な作りの脇差しと、少女が元々着用していた衣服を布袋に慌ただしく収めた。

しかし、衣服は所々切れたり穴が空いたりしていて、最早使い物にはならないだろう。

「さて、これでご要望通り荷物を返したのだから、こちらの話を聞いてはくれないだろうか。慶太はどうする？」

老人は食卓の、少女の真向かいに腰を下ろし、自分用の湯のみ茶碗から入れたての茶を軽く啜った。

慶太は無言で頷くと、老人の左側の席に腰を下ろす。

「まず、お互いに名前も知らないのでは話し難だろう。わたしは代峰（たいほう）という、今は田舎で隠居暮らしを慎ましく送っている物好きな老人だ。そして、この子は慶太、わたしの遠縁の子で、故あって今は共に暮らしている」

「私は、明日見……」

「では、明日見。先程も荷物は拝見させてもらったと言ったが、その中で少々気になる事があってね、それで少し話を伺いたいと思ったのだよ」

「はい……」

「話を聞きたいというよりも、むしろ私の思う所を述べて、明日見の見解を聞きたいと言った方が正しいのだろうか。少々長くなるかも知れないが、惚けた年寄りの戯言と聞き流してくれればそれでよい」

「はい……」

「慶太が、河原に倒れている明日見を発見して連れて来たのが一週間程前。全身にかなりの傷を負っていた事から、山賊や夜盗の類いに襲われたのか、もしくは野獣に襲われて傷付いたのだろう。しかし、夜盗や山賊に襲われたのなら、荷物一式を携帯していた事の説明が付かない。明日見には武術の心得がある様だから、夜盗や山賊から一旦は逃げ延びた物の、力尽きて河原に倒れた可能性もあるだろう。しかし、左腕の深手を見る限り、野犬や狼と言った野獣の類いに襲われた可能性が高い。野獣に襲われたのならどこで襲われたのか？」

明日見は、つい一週間程前の出来事を思い出し、傷口は塞がったが未だに痛みの残る左腕の傷痕を摩りながら、代峰老人の話に無言で耳を傾けていた。

「明日見が倒れていた川は、神々の住む山とも、神々の住む天界を支える山とも言われる遥か蓬莱山の中腹より発し、更には蓬莱山を取り囲む様に一面に広がると言われる青海

（せいかい）樹林、俗にいう迷いの森を抜けて中原（ちゅうげん）の大穀倉地帯へと流れている。中原はおろかこの辺でも野獣の類いは滅多に出没しないので、きっと明日見は青海樹林で野獣に襲われたのだろう。さて、君は青海樹林で一体何をしていたのだね？ 明日見」
問いかけても、明日見には返答のしようがなかった。

予め導師に今回の“お努め”の重要性を説かれ、他言無用と固く言い含められて来た以上、“お努め”の内容や自らの出自に付いては、一切を明らかにする訳にはいかなかった。しばし間があり、代峰老師が半ば諦め顔で『話せない事情があるなら仕方があるまい』と言葉を次いだ。

「先程明日見の荷物を確認させてもらったと言ったが、気になる点について尋ねてもよいかね？」

そう問いかけても、明日見には何と返答してよいか分からなかった。

「明日見の脇差しは、多分先祖伝来の物と思うが、その脇差しの柄の所にある紋章に見覚えがあるのだよ。これでも現役時代は国立学術院で近代史を専攻していたのでね、一般に余り知られない豪族の紋章にも多少の知見はある。それで、肝心の脇差しの紋章だが、先の李帝と最後まで覇を競った撰晶（そんしょう）に付き従った地方豪族、大乘（だいじょう）家の紋章に多分間違い無いだろう。どうかね」

明日見は自らの出自に関しては一切応じる気がない以前に、脇差しは母の形見だと言う事以外は何も知らなかった。

それだけに、代峰老師の意外な話には興味が湧いた。

しかし、ここで興味を示す素振りを見せる事で、逆に相手のペースに嵌ってしまう事は避けたいと感じた明日見は、『大乘家』という言葉の頭に刻みつつ極力無反応を装った。

「もう一つは、今明日見が懷に抱えている、革の小物入れの中身についてだが、それはもしや伝説の奇石ではないかとの疑いを持っている。実は、以前わたしも偶然奇石を目にし、この手にした事があるのだよ。只の一度きりだったが……。もし、それが奇石だったとすれば、その扱いには十分な注意を要する。ある知人の話だが、奇石を持つべき資質のない人物が手にした場合、その者の人生が狂わされてしまう事があるらしい。単なる杞憂に終われば良いのだが、もしそれが奇石であり、奇石の特殊な力と性質故に明日見の人生に狂いが生じ、更に周囲をも巻き込む事態に発展しかねないなら、放っておく訳には行くまい」

「仮に……」

この老人には隠しきれないかも……。と明日見は内心動揺したが、敢えてここは強気に出ようと、久々に言葉を挟んだ。

「仮に？」

やっと食いついて来たとはばかりに、代峰老人がすかさず繰り返す。

「もし、仮にこれがその奇石だとしたら、一体どうするつもりですか？」

しばらく間があった。

しかし、代峰は返す言葉を探していたのではなく、敢えて間を空けたのだという風に再び話し始めた。

「学術的な興味はある。例えばその石が本当に奇石なのか、奇石だとすれば普通の石とどのように違うのか、構造や特性を詳しく分析する事も出来る。しかし、問題の核心はそのような奇石の物質的な面よりも、石の力が君や、この社会に及ぼす影響の方にある。それが奇石ならば、扱い方を誤れば悲劇的な事件をも招きかねまい。それが持ち主本人だけの問題であれば放置してもおけるが、奇石にまつわる幾つかの伝承を見る限り、周囲をも巻き込む大惨事に発展する可能性がある。そうなれば他人事とも言えないだろう？ 現に奇石かも知れない石の持ち主がここにいる以上、無視出来ないのだよ」

明日見は、代峰老人の言葉に、導師から“お努め”を果たす様指示を受けた事、導師から『今回の“お努め”の役に立つ』と石を譲り受けた事、石の扱いに関する諸注意を受けた事を思い出していた。

石の扱いに付いては明日見自身にも不明な点や不安点があったから、代峰老人の言葉に耳を傾ける価値があるのかも知れない。

しかし、代峰老人が未だにどのような人物であるのかが伺い知れない以上、安易に心を許してしまう事は危険であり、それはひいては、明日見の“お努め”の正否そのものにも関わる重大事だった。

老人がなまじ奇石に関する知識があると思われる人物だけに、もう少し詳しい情報を得たいとする自分と、これ以上近づいては危険だとする、相反する二人の自分が明日見の中に同居していた。

いっそのままここを離れるべきだろうか。

そんな明日見の葛藤を先読みするかの様に、代峰老人が続ける。

「わたしが敢えて明日見の荷物を預かったのは、もちろんその石を見たからなのだが、そのままではいつ明日見が姿を眩ますか分からないと考えたからなのだよ。その石に付いて話すべき事は話す必要がある。その石さえ預かっておけば、石を置いてここから出て行く事もないだろうと考えたのでね。そして、今日やっとまともに向かい合う事が出来た。しかし、まだ充分だとは思っていない。明日見がその石をどのようにして手に入れたのか、その石で何をするつもりなのか、その石の特性を充分理解しているのか、まだまだ聞きたい事は山程あるし、言うべき事もある。私が見る限り、明日見はすぐにでも旅立つつもりの様だが、深手を負い、怪我に伴う熱病を患った後でもある。もう少し体調が回復するまで、ここに留まってはどうかね？」

明日見は老人を見て、そのまま慶太にも視線を向けた。

明日見に取っては体の具合もあるが、石について、この世界の事に付いて、その他学ぶべき事が幾らでもある。

しかも、代峰老人は国立学術院という所で学問を修めた、幅広い知識を持つ人物だと推察出来た。

明日見が“お努め”を遂行するには、この世界に関する様々な知識が必要である。

現に、国立学術院という存在を明日見は知らなかった（むろん学校の一つである事は推測出来た）し、『天元堂』では乱世と教わって来た下界の様子も、この場所に限って言えば違う印象を受けた。

『天元堂』は存在自体が下界とは隔絶しているので、実際に現場に身を置かなければ分からない事や事実誤認、下界の最新事情には対応し切れない等、幾ら下界の大まかな現状を認識したとしても自ずと限界があったのだ。

「そう堅苦しく考える事もあるまい。とりあえずは体の具合を回復する事を考えなさい」
 そういつて話を打ち切ると、代峰老人は席を立った。

「少し遅くなってしまったが、昼食にしよう」

その場では敢えて明日見の回答を求めなかった代峰老人の背中を見送りつつ、明日見は慶太に向き直った。

「あの、ごめんね」

「うん」

慶太はうつむいたまま、まだ痛みの引かない腕を摩っている。

「ちょっと腕を出して見て」

慶太は『又何かされるかも』と心配しつつも、しかし先程の様な殺伐とした状況には無いことから、少々戸惑いつつ腕を差し出した。

明日見は慶太の手首から肘、二の腕にかけてを二～三度ずつ手で撫でさすった。

「どう？」

明日見が問いかけるまでもなく、慶太の腕からみるみる痛みが引いていった。

それに伴って、慶太の表情からも心なしか強張りが解けていったようだ。

「うん。大丈夫。痛くなくなったよ」

「本当にごめん。仲直りしよう」

明日見は慶太の手のひらを握りしめた。

最初は何の反応もなかったが、しばらくして慶太も力強く握り返して来た。

*

その日の午後、明日見は代峰老人に『いずれにせよしばらくここに逗留するのだから、生活必需品を買い揃えて来るとよい』と、明日見がしばらくこの地に留まる事を前提に、半ば無理矢理買い物に出る様促された。

慶太が道案内を引き受ける。

とはいえ、慶太の自宅は人里から少々奥まった所にあつて、中心街に出るのに一刻（約一時間）は必要だった。

しかし、二人きりで一刻の間黙々と歩き続けられる訳ではなく、いつしかどちらからともなく話しかけ、わだかまりのあつた二人の関係改善に大きな効果があつた。

慶太は現在十三歳で遙か昔（多分十年くらい前）に代峰老人の元に引き取られた事、普段の生活は早朝に起きて代峰老人とともに家庭菜園の世話、午前中は学校に通い、午後からは家庭菜園の世話か、魚釣りか、買い物か、その他代峰老人の手伝いか、もしくは自由時間を過ごしている事等を話した。

そしてちょうど互いに滑らかな会話が交わせる状況になった頃、眼下に中心街を見下ろす小高い丘の頂きに達した所で、ふと慶太が足を止めた。

「ほら、あそこが中心街だよ」

丘を下った窪地に、石畳と思しき通りが十字に交差し、その通りを取り巻く様に多くの建物が密集しているのが分かった。

十字に交差した通りの一本は、そのまま中心街から奥側、つまり平らな穀倉地帯が続く大平原に向かって伸び、そのままうねりながら視界の奥に霞んでゆく街道と思しき道に繋がっていた。

少し離れた右手側には、余り大きくはない川が街道と並走する様に、やはりうねりながら続いていた。

「本当は川沿いの道の方が近道なんだけど、ここは見晴らしがよいでしょ？」

「そうだね。この辺一帯が一望出来るんだね」

「でも、それだけじゃないんだ。ちょっと振り向いてみて」

慶太に促されるままに明日見が振り向くと、丘を下って一里（約五キロ）程離れた辺りから一面の森に覆われ、その先に尖った頭を突き出した山が見えた。

蓬萊山と呼ばれる、天界を支える八つの峰のうち、最も優雅な稜線を持つと言われる不似の山、明日見が幼少からの十年余りの時を過ごした、第二の故郷とも言える山だった。

「蓬萊の山だよ。いつもは山頂に雲を被っているんだけど、今日みたいに山頂が見えるのは珍しいんだ」

大抵山頂が雲に隠されている事は、明日見も知っていた。

何しろあの山の中腹に暮らしていたのだから、不似の山が滅多に山頂を現さない事も、なぜ現さないのかもよく承知していた。

しかし、そんな不似の山が滅多に見せない山頂を露にしてくれている様子を見て、明日見には不似の山が自分に暫しの別れを告げ、また長く困難な“お努め”の完遂を願い、励ましてくれている様に見えた。

明日見は改めて“お努め”を無事成し遂げて、再びあの峰の元に戻る事を誓った。

「ねえ、明日見、聞してる？」

しばしもの思いに浸っていた明日見の肩を慶太が揺すり、突如現実には引き戻された明日見は、心ここに非ずといった生返事を返す。

「もう、全然聞いてなかったんだ……」

「あの山の姿、とても綺麗でしょ？ 引き込まれちゃった」

誤摩化しては見たものの、慶太相手にいらぬ気を回す必要がないとすぐに知った。

既に慶太の関心は、早く中心街へ降りて買い物を済ませる事に向いていたのだ。

「さ、早く行こうよ。寄り道したから、早くしないと帰る前に日が暮れちゃう」
慶太が小走りで丘を下ると、明日見もそれに続いた。

＊

町までの道すがら、明日見は慶太から『中心街と言っても大きな町では無い』という話を聞いてはいたが、それでも人生の殆どを不似の山で過ごした明日見に取っては、充分過ぎる人の多さであった。

『天元堂』では、どんなに多くても三百人を超える事は無かったが、慶太の話によれば、この中心街だけでも住民は二千人くらい、周辺に点在する細かな集落を合わせれば三千人を越えるのではないかという事だ。

明日見の感覚とは一つ桁が違う。

全面石畳の表通りには、食料品や日用雑貨、衣服、工具の店等が並んでいた。

街の中心には十字に交差するもう一つの大通りがあって、その通り沿いには食堂や旅館、居酒屋等があるらしい。

また、表通りには買い物帰りの主婦と思しき女性の姿が目立った。

この地域は農業や漁労者の割合が高いそうなので、昼間に町中に留まる男性の数は必然的に少なくなるらしい。

その代わりに、夜になると居酒屋等の繁華街が賑やかになるのだそうだ。

慶太はこの町では比較的皆に好かれている様で、町中を歩いているとよく声をかけてくる人がいた。

更に、慶太が声をかけられる度に付き添っている明日見の事を聞かれ、その度に明日見も挨拶して回ると言う状況が繰り返された。

恐らく、この一日でかなりの割合の町の住民に明日見の存在が知れ渡ったに違いない。

また、代峰老人を含めた三人で、予め明日見を慶太の親戚として扱う事が決められていたから、町の人々にもかなり好意的に受け止められた様だった。

明日見は、とりあえず借り物の衣服を何とかしたかった為、衣料品店に入った。

その店は、この町で唯一の衣料品店という事だった。

不似の山にいた頃には、生成りで装飾も味気ない修行者用の白装束ばかりだったし、下界に下りる時に用意してもらった服も、地味で何の彩りも無い服だった。

しかも、その服も迷いの森の踏破の間にボロボロになってしまった。

いつまでも借り物の服を着る訳にはいかないし、替えの服も必要だった。

「色々な服があるんだ」

これまで店で服を買った経験の無い明日見は、物珍しかったのか男物、女物、様々な用途の服を眺めて回っていた。

と言っても、ここは蓬莱山を臨む位置にあり、迷いの森の入り口にも近い辺境と言ってもよい土地である。

人口も限られているし、交易が盛んな訳でもない。

だから、国の中央部の大都市に比べれば、店の数や規模も小さく、取り扱う衣服の種類も限られていた。

しかし、それでも明日見に取っては、選ぶ程服の種類があるという事が楽しく感じられた。

「いらっしゃい」

店番のおばちゃんが近づいて来る。

「ねえ、僕の親戚の姉ちゃんなんだけど、オマケしてあげてよ」

早速慶太の値引き攻勢が始まる。

「へえ、慶太の親戚かい。べっぴんさんじゃない。そんなお嬢さんにぴったりの服があるよ。それとも専用の服をこしらえる？」

おばちゃんも“久しぶりの新規顧客”と、明日見の気を引こうとするが、明日見は既に男性用の作業服の置き場であれこれと物色中であった。

「なんだい。そんな男物の華の無い服よりも、こちらの服の方が女性らしさを引き立てるって言うのに……」

「そこにあるのはみんな男物の作業服だって。女物は向こうにあるみたいだよ」

慶太が明日見の元に駆け寄るが、明日見は全く意に介さない。

「女物ね……。ああいう動き難そうな服は、ちょっとね」

そっか！ と、慶太はようやく思いつくと、店のおばちゃんに切り出した。

「ねえ、この姉ちゃん、武術やるんだ。だから、武術の邪魔にならない様な動きやすい服って、無いのかなあ？」

おばちゃんは『動きやすい服ねえ？』としばらく思いあぐねた後、はたとひらめいたという様に、一旦店の奥へ入った。

程なくして、一着の服を持って出て来る。

「どうだい？ これならお嬢さんの希望にも応えられると思うけど」

おばちゃんが差し出した服は、作業服と似た様な厚地の丈夫な生地を使っていたが、作業服の様にダブついてなく、程よく体にフィットする様に見えた。

濃い緑色の、上下一式だった。

明日見も興味を引いたらしく、上着をそのまま羽織って合わせてみる。

「どう？」

「カッコいい……。ていうか、何か探検士の服みたいだね、それ」

「よかったら、そこの更衣室で着替えてみるといいよ」

おばちゃんに促され、明日見は布で仕切られた簡易更衣室の奥に消える。

「でもさ、あんな探検士みたいな服、おいてるとは思わなかったよ。僕も欲しいかも……」

「そりゃそうさ。だって近くに迷いの森もあるし、蓬萊の山だって見える所にあるんだから、探検士が来る事もあるだろう？ だから、一応探検士向けの服も在庫していたのさ。と言っても、最近は探検士も余り見かけないから、売れ残ってたんだけど……。ま、慶太もあの服が着たいのなら、もう少し大きくなるとね」

程なく明日見が全身を濃緑色に染めて出て来る。

「ふうん。やっぱり見栄えがいいと何を着ても様になるねえ」

「やっぱりその服カッコいいよ」

両者からのなかなかの好反応に、当の明日見も少々照れた様に笑みを返す。

「サイズはどう？ きつい所とかは無い？」

明日見は軽く手足を動かしながら、

「うーん、少し腰と胸がきつい気もするけど、いい感じに伸縮する布みたいだから、特に問題はなさそう」

「まあ、元が男物だからねえ。逆にもう一回り大きいサイズだと、今度は緩くなりすぎるでしょ」

「そう……。それなら、この服はもう一着ありますか？ 替えが欲しいので」

「残念だけど、そのサイズは一着しか無いの。後は、お嬢さんの希望に合う様な動きやすそうな服と言ったら、女性物ではこのくらい、後はその辺の男物しかないねえ」

明日見はおばちゃんに渡された服を合わせてみるが、それ程悪い印象ではなかった。

というよりも、一着目の探険士仕様の服が大層気に入っていたので、二着目には余り執着が無く、とりあえず替えがあれば……という感覚で即決となった。

再び更衣室で元の服に着替えると、明日見は店のおばちゃんに試着した服を手渡し、懷から布袋を取り出した。

おばちゃんは慣れた手つきで服を畳み直し、二着をまとめてお手製と思われる古新聞で作った紙袋に詰めてゆく。

「探険士用の服が上下込みで百二十圓。もう片方が上も下も二十圓ずつで、合計百六十圓……なんだけど、慶太の顔で十圓おまけね」

「ありがとう。あの、これで足りみますか？」

明日見が店のおばちゃんに手渡したのは、おばちゃんが見た事も無い一枚の金貨だった。

金なのだから、それなりの価値がある物なのだろうが、これまで金とは関わりのない生活を送って来た片田舎のおばちゃんが、通常の通貨ではない金貨をいきなり手渡されても、どう処理した物か判断に困っていた。

「これ、どこの国のお金だい？ こういう紙幣は持ってないのかい？」

おばちゃんは商売用の簡易金庫から百圓紙幣を一枚取り出してみせた。

「幾ら慶太の知り合いだと言っても、ちゃんと使えるお金を払ってくれないと、売る訳にはいかないのだけど……ちょっと待って」

おばちゃんは店の外へ出たかと思うと、たまたま店の前を通りかかった、寝ぼけた表情の髭面の男を呼び止めて店に戻って来た。

一見のほほんとして人当たりが良さそうで、かといって、如何にも誰にも明かしたくない秘密の過去の一つや二つはあってもおかしくはない、そんな一癖も二癖もありそうな男は、おばちゃんに促されるままに明日見の掌にある金貨を掴んだ。

そのまま表、裏、そしてまた表と、何事かを入念に確認するかの様に、金貨を慎重に鑑定していた。

「お嬢ちゃん、ずいぶん珍しい物持ってるねえ」

男の表情がはたと緩んだ。

「これは、李朝時代に発行された李朝金貨だな。色々歴史的な経緯があるから、この金貨を見かけなくなってかなりたつけど、一体どうやって手に入れたんだ？」

明日見は返答に迷い、暫し沈黙が流れた。

「ま、いいか。それにしても、その金貨は普通の店では通用しないだろう。お嬢ちゃんがその気ならうちで両替してやってもよいが、どうする？」

明日見は、男のいっている事がよくわからず、おばちゃんの方を振り返った。

「ああ、この人はね、すぐそばの質屋の店主さ。質屋だったらこういう珍しい物にも詳しいだろうってんで、聞いてみたって訳さ。さあ、さっさと両替してきて、服代の清算をしてくれ」

納得がいったと明日見が無言で頷く。

男は明日見の掌に金貨を返し、付いてくる様に促すとそのまますたすたと歩き出した。

「慶太、ごめん、ちょっと待ってて」

そういい残すと、明日見は男を見逃さない様に慌てて店を出る。

まだ外は明るかったが、日差しがかなり西に傾いていた。

明日見は時間を気にしつつ小走りで男の傍らに追いつくと、男が待っていましたとばかりに問いかける。

「お嬢ちゃん、この町は初めてか？」

「はい」

「慶太の所の客人か？」

「まあ、そうですね」

「ふうん。まあ、老師は元々お偉い先生だったらしいから、色々と変わった知り合いがいるのかも知れないが、その金貨は余り見せびらかさない方がいい。あんただって歴史の勉強くらいしただろう？」

「歴史？」

「ああ。まさか、あんた異国の人間か？　今でこそその金貨の存在すら殆ど忘れ去られてしまったが、昔はその金貨こそ李帝による悪逆非道な支配の象徴だったからな。今でも年寄り連中にはその頃の記憶が忘れられない者もいるだろう。そういう輩の目に金貨が触れると後々厄介って訳さ。そんな下らん事で、みすみす痛い腹を探られたくもないだろう？」

「痛い腹って……」

明日見は何も反応出来なかった。

この町では質屋の男で通っている、一見のほほんとしたと惚けた親父を装っていたが、実は意外な過去があるのかも知れない。

その何もかも見透かされた様な物言いに、明日見は何とも表現し様のない漠然とした恐怖に襲われていた。

今はただ、そういう心の動揺を極力表に出さぬ様、努めて冷静を装うのがせいぜいだった。しかし、質屋は明日見のそういった微妙な心の動きも手に取る様に見極めているのだらう。

「さあ、ここだ。少し狭いが、店の奥でもう少し詳しく鑑定してみよう。通路の脇にあるのは全部商品だから、落としたりしないでくれよ」

男が予め注意を促すのも当然……これでは店というよりも倉庫と表現した方がこの場の状況を正確に表しているだろう。

質屋とはどこもこのように客を寄せ付けない店構えなのだろうか？

男は慣れた体裁きでするすると店内に潜り込むが、明日見は案の定、通路中程に積み上げられた小箱の山一つ分を倒してしまった。

四～五個の小箱が狭い通路上に転がっていたが、辛うじて連鎖的倒壊は免れた様だ。

「おいおい、大切な商品に傷をつけないでくれよ」

言っている質屋の表情はニヤニヤと冗談めかして、全く怒った様子ではない。

「そんな事を言われても……」

文句を返そうとした明日見を遮る様に、質屋に『やっと倉庫を借りられた所だから、半分は近々倉庫に移す予定なんだ。しばらく我慢してくれよ』と機先を制されてしまったので、咎め立てする言葉を失ってしまった。

質屋は明日見の脇をすり抜けて、慣れた手つきで通路に飛散した小箱を再び山に積み上げる。

きっと珍しい事ではないのだろう。

「さて、では鑑定に入ろうか。また金貨を見せてくれるかい？」

質屋は再びするすると明日見の背後を抜けてカウンターに入り、ランプを付けて準備万端と言った様子だ。

明日見は無言のまま懷から布袋を出し、その中から無造作に五枚の金貨を掴んでカウンターの上に放った。

質屋はそのうちの一枚を掴むと、ランプの明かりに近い所で鑑定用の虫眼鏡を金貨に当てて、より詳細に、しかし手際よく一枚ずつ鑑定していった。

質屋は時折『うーん』と唸ったり、『おお！』と驚きの声を上げていたが、明日見は敢えて何も反応せずに鑑定が終わるのを待ち続けた。

しばらくして質屋が虫眼鏡をカウンターにおいた所で、明日見は鑑定が終わった事を知った。

「今持っているのは五枚だけではないのだろうか？」

「まあ……」

「とりあえず五枚だけ換金という事か。別にあなたの素性やこの金貨を手に入れた経緯には興味が無い。で、手っ取り早く鑑定結果を報告すると、これらは全て李朝金貨に間違いな

い。しかも、そのうちの一枚は李朝元年に試作品として百枚だけ限定発行された逸品だ。本来なら同じ李朝金貨でも発行年度によって若干価格が違うのだが、この町で李朝金貨の価値が分かる連中がいらない以上、俺達質屋のルートで他の町に流す事になる。そうすると、金貨を捌くまでに少々時間と手間がかかるからな。限定発行の一枚は三千圓、他は一枚五百圓ってところでどうだ？」

「それでいいよ。いずれにしてもこちらにはこの金貨の価値なんて分からないし、この金貨では通常の使用に差し支えるなら、いずれにしても交換してもらえないのだからね」

「随分とあっさりしているんだな。それじゃあ、商談成立だ。後で返してくれなんて言うなよ」

「まさか。いずれにしてもお金は必要なのだし、全てを換金しなかったのも、当面の生活費を確保したかっただけだからね」

「まあ、心配すんなよ。それなりの市場がある首都近辺の質屋には劣るかも知れないが、そんなに悪い換金率ではない筈だ。それにしても、何も知らないでよくこんな僻地まで旅して来たな。言いたくなければそれは構わないが、その年齢で後ろ暗い過去を持つ身とは、全く因果なものだ」

「後ろ暗い過去？ あなたこそ、田舎町の質屋の店主にしては、色々と詳しそうだけど…」

「ははっ、俺か？ 昔俺が少しやんちゃだったただけだ。この年になるとな、真っ当な生活を送って来た者でも、それなりには世の中の事情に詳しくなるからな」

質屋が百圓札五十枚の束を二度、三度と慎重に数え直してから、明日見に手渡す。

「一応確認はしたが、数え直した方がいいぞ。後で数が違ってましたと言っても受け付けないからな」

明日見が受け取った百圓札の束を検算している間、質屋は交換した李朝金貨を片付け、ふと思い出したエピソードに想いを巡らせていた。

——そういえば、蓬萊の山に住むと言う仙が、時々下界に降りて来るという話を聞いた事がある。

仙とは、天界に住むと言われる神々と共に生きる事を誓い、又鍛錬によって神の業に近い特殊能力を持つ者なのだという。

それはかつて人であったとしても既に人ではなく、中には齡千年を越える仙も存在するのだとか。

通常、仙は下界と天界の狭間にあって、天界を支えていると言われる蓬萊の山々に住んでいるらしいのだが、そんな仙が下界に降りる事があるらしい。

天界の神々の御用をしているのだとか、気紛れに物見遊山感覚で、時々下界を訪れるのだとか言われているが、実際に下界を旅する仙に出会ったという話は聞かない。

しかし、その様な噂話があるのだから、全く根拠のないヨタ話と斬って捨てる事も出来ないだろう。

例えば、慶太の所の客人と称するこの女、李朝金貨では旅の途中も難儀した筈なのだが、ここへ来るまで李朝金貨を巡る歴史的経緯を知らなかった様だ。

老師の経歴を考えれば異国の知人がいても不思議ではないし、実際に慶太が客人として扱っている様だから、多分、老師や慶太とは何らかの関わりがあるのだろう。

しかし、それならばどうやってここまで来たのだろうか？

異国人なら歴史観の違いもあるだろうから、李朝金貨の件はそれでも説明が付く。

だが、異国人なら人里を通らずにいきなりこの町に現れるのは不可能だ。

ここは迷いの森の際にあり、大抵の旅人は街道を下って来る。

街道を下って来たのなら、これまで金を使わずにどうやって旅をして来たというのか？

金を使って街道沿いに旅して来たならば、今更李朝金貨云々という話が出る事自体がおかしい。

まさか、こいつが蓬莱の山を降りて迷いの森を抜けて来た仙なのか……まさかな。

質屋は自らの突拍子もない考えを打ち消した。

いや、むしろこの女が祖国で犯した罪を免れる為に、元々縁があった老師を頼って、わざわざ国境を越えてきたのかもしれない。

であれば、関所のある街道を避けて旅する動機は充分にある。

街道を避けての旅ならば、街道筋の商店を利用する事もないだろうし、李朝金貨の逸話を知らなくても辻褄は合う。

ということは、まさかこの李朝金貨は盗品か……可能性はあるが、通し番号の振っていない金貨では確認のしようもない。

念の為に、後で治安部隊に探りを入れておいた方がよいかも知れないな。

金貨の処分も、急ぐに越した事はないだろう。

まあ、仮に最悪の事態に巻き込まれたとしても、こちらは『知らぬ存ぜぬ』で通せばよい。

質屋が一人想いを巡らせているうちに、明日見は百圓札五十枚を確かに確認した。

まさか、と、質屋は自分の頭に浮かんだ奇妙な思い過ごしを払いのけようとしたものの、一度膨らみだした様々な妄想を払いのける事は出来なかった。

そこで、とりあえず探りを入れる意味でこう切り出した。

「もし、李朝金貨の事を詳しく知りたければ、代峰老師に聞いたらいい。老師は元々その道の偉い先生だったらしいから、色々教えてもらえると思うぞ。知っておいて損はないだろう？」

「そうするよ。ありがとう」

店の狭い通路を抜けてゆく明日見の後ろ姿を見送りながら、何かただならぬ事態が背後で密かに進行している可能性に想いを巡らせ、久しぶりに血気盛んな若かりし頃を思い出して、一人心躍らせる質屋の店主だった。

*

質屋で換金を済ませた明日見は、そそくさと衣料品店に戻って衣服代を清算し、引き続いて細々とした日用雑貨品の購入を手早く終わらせた。

もう陽がかなり西に傾いていた為、明日見は日没前に代峰老師の元に戻りたかったのだが、慶太は余り気にならないらしい。

「ちょっと待って、せっかく来たんだから、治安部隊の詰所にも寄っていこうよ」

「治安部隊？」

「何があっても、治安部隊の詰所に逃げれば何とかしてくれるから、知っておいた方がいいでしょ？」

慶太は明日見の返答を待つ事無く、治安部隊詰所に向かうのが元々の目的とでも言わんばかりに、十字路へ向かって歩いていく。

明日見が小走りで慶太に追いついた時、慶太はふと足を止めて明日見の方を振り返った。

「姉ちゃん、あれが治安部隊の詰所だよ」

慶太の指し示す先には、白い石積みの建物があつた。

この町でもっとも賑やかな交差点から程近い場所にあつて、町の治安を守る拠点に相應しく、街道沿いの商店と比べても目立つ頑強な作りの建物だ。

「あんな所にあつたんだ」

明日見は先程質屋を訪れた際にこの交差点を通つたのだが、全く気付かなかつたのだ。

質屋は街道を挟んで反対側にあつた為、また李朝金貨の両替に関心がいつていた為に気付かなかつたのだろうと、ふと質屋の建物の方向に視線を傾ける。

質屋は、外から見ると大小様々な箱が積み上がっていて、やはり店舗というよりは倉庫にしか見えなかつた。

「行こう」

慶太の後について明日見は石畳の道路を横断し、堂々たるたたずまいを見せしている治安部隊詰所の前に辿り着いた。

明日見は、大きな石材を積み重ねた、見るからに頑丈そうな壁に触れてみる。

表面は少しザラついているが、石の接合面は寸分の隙間も無く積み重ねられており、一見してかなり精巧な作りである事が窺えた。

森林地帯の外れにあつて、周囲に有望な石切り場も無さそうなこの町では、かなり贅沢な作りと言って良いのだろう。

「姉ちゃん、どうする？」

一足先に詰所の中に足を踏み入れている慶太の声だ。

「どうしたの？」

明日見が恐る恐る中を覗き込むと、慶太が少々落胆した表情を浮かべて出て来る。

「うん。今、ちょっと誰もいないみたいなんだ。せっかくここまで来たのに……」

慶太は期待外れな結果に肩を落としていた。

「それにしても、治安部隊詰所って、結構立派な建物なんだ」

明日見はがっくりと項垂れている慶太の肩に手をかけ、この町では珍しい二階建ての建物を見上げていた。

「ねえ、ちょっと待っててもいい？」

ふと、慶太が明日見に同意を求めて来る。

「でも、もうすぐ日が暮れて来るよ。早く帰らないと、お爺さんが心配するでしょ？」

「多分、ちょっと見回りに出ただけだよ。すぐに戻るよきっと……駄目？」

治安部隊に相当な思い入れでもあるのだろうか。

慶太の懇願する表情は切実さを秘めていて、明日見には慶太を無理に従わせる事は出来なかった。

「わかった。そうしたら、待っている間にもう少しこの辺を見て回ろうか」

「うん！」

慶太が満面の笑みを返す。

「治安部隊が好きなんだね」

「うん。前にちょっと危ない目にあった時に、治安部隊の公亮（こうりょう）さんに助けてもらったんだ。その時、大人になったら治安部隊に入りたいなって思って、それから時々勉強しに来てるんだ」

「そうなんだ。という事は、慶太に取って治安部隊は憧れの的って所なのかな？」

「まあね」

そんな事を喋りながら、二人は道なりに歩いていた。

その辺りは既に町外れと言ってもよく、中心街とは雰囲気異なる店が並んでいる。

明日見の視線の先には、様々な色のランプで飾り立てた店があった。

「ねえ、戻ろう」

慶太が明日見の衣服の袖を引っ張る。

「この辺は居酒屋とかがあるから、近づいちゃ駄目だって爺ちゃんに言われてるんだ」

言われて周囲に視線を漂わせると、もう薄暗くなって来たからなのか、怪しげな足取りで歩く男や、派手に着飾った女の姿がちらほらと見受けられた。

「なるほどね。本当に近づかない方が良さそう」

明日見がそうやって振り向き様、目の前に二人の男が立ちはだかっていた。

「何が近づかない方が良さそうなんだあ？」

見るからに堅気の間人ではないと自己主張著しい風体の男が、三年ものの腐食したニンニクを彷彿とさせる口臭を吐き出しながら、明日見の鼻先でインネンをつけてきた。

明日見はわざと露骨に嫌悪の表情を見せて顔を歪め、男の口臭が鼻を直撃しない様にと顔を背ける。

「可愛い顔してるくせに、随分と生意気じゃネェか」

男は薄汚れた無骨な手で明日見の顎を掴むと、強引に正面を向かせる。

「俺はな、生意気な女が大好きなんだ」

わざと明日見の鼻先に強烈な腐臭を吐きかける様に、男は明日見の鼻先に口元を近づけて言った。

「おい、このガキ、あの偉そーなジジイんところのガキじゃね？」

もう一人の男が、明日見の隣にいる慶太を睨みつける。

「だな。思い出したぜ。あの時、こいつのお陰でブタ箱（留置所）に叩き込まれた事を、そう簡単に忘れるかっての」

反射的に男達のただならぬ気配を察したのか、慶太は明日見の背中越しに隠れる様にしていた。

「慶太、後ろに下がっていなさい」

明日見は背中越しに語気を強めて指示し、目の前の男二人を交互に睨みつけながら、一歩後退して適当な間合いを取った。

「けっ、やる気かこのアマ！」

「おもしれえ」

二人は薄気味の悪い笑いを浮かべながら舌なめずりしつつ、今にも明日見に飛びかからんとしたその時、二人の男の背後に一回り大きな山の様な影が現れた。

「喧嘩はいかんなあ。ケンカは」

山の様な大男は背後から二人の男の肩に手をかけると、それだけで二人の男達は情けない悲鳴を上げ始める。

「いてて、離せよ。別にケンカなんかしてねえって」

「なるほど、この辺では見かけない旅人の娘さんを見つけたんで、道案内をしてやろうという訳か？ それは結構。後はこちらで引き受けよう」

大男が二人の肩を叩くと、二人は『ウゲェ！』と耳障りの悪い悲鳴を上げて、膝からその場に崩折れた。

「お前達が改心した事はよくわかった。後は引き受けたから、もう行ってもいいぞ？」

「けっ」

男二人は唾を路肩に吐き捨てると、そのまま転がる様にして、道路に交差している薄暗い脇道の奥に消えていった。

「源蔵さん。遅いよう？」

柄の悪い二人組の逃走に安堵したのか、慶太が先程までとは打って変わった笑顔で、目の前の大男に飛びつく。

「ははっ、済まなかった。ちょうどケンカの仲裁をした帰りだったんだが、何とか無事だったか」

明日見の目の前に聳える大男こそが、慶太が待ち望んでいた治安部隊員の様だ。

「この辺りは物騒だから、とりあえず詰所に戻ろう」

確かに……もう一度確認する様に背後を振り返った明日見の視界には、日の暮れるのを待っていたかの様に、怪しい胡散臭げな格好の男女の群れが、薄暗い脇道からわらわらと沸いて出てくる様子が映し出されていた。

*

「それにしても、武術を嗜む女とは珍しい……おっと、今の台詞は撤回だ。最近首都の方では『差別撤廃運動』とやらが盛んで、『女が云々……』とittedただけで突き上げを食らう事もあるらしいからな」

明日見は、治安部隊詰所の石造りの殺風景なオフィスの椅子に腰を降ろし、治安部隊員源蔵に振舞われたお茶で一息入れている所だった。

「慶太は、冷えたみかん水でいいか？」

みかん水とは、みかんの絞り汁を水で割って、香料などで味と香りを整えた子供向けの飲み物だ。

様々な理由から商品価値を落としてしまったみかんが、汁だけを搾り取ってみかん水の原料に使われるのだという。

以前は商品価値のなくなった果物はすべて廃棄されていたのだが、みかん水の出現によって、みかん農家にとっても果物屋にとっても貴重な副収入が増えたと好評らしい。

また、香料などを付加する事によって保存性も向上したとか。

「ねえ、源蔵さん。公亮さんは？」

「隊長は夕刻の見回りに出てる所だ。あと一刻（約一時間）は戻らないな」

「そっか……」

どうやら、慶太のお気に入りには治安部隊の中でも公亮という隊長の様だ。

しかし、お目当ての隊長が不在と聞き、慶太はがっくりと肩を落とす。

「ところで……」

明日見が源蔵に話を振った。

「さっきの二人組の事なんだけど、慶太と何かあったの？」

「あの二人組はな、以前、慶太がちょっとした悪戯心から仕掛けた罠に嵌って、その仕返しに慶太を殴ったとかで、一週間程地下の留置室に泊めた事があったんだが、どうも、その事をまだ根に持っているらしくてな、慶太を見つけると絡んでくる。こちらも注意しているつもりなんだが……」

「そういう事ね」

「その時に二人組の暴行を止めに入っったのが隊長だったんだが、それから慶太にえらく気に入られてね。今では毎日とはいわないまでも、一～二日おきには慶太が顔を見せる様になったと言う訳だ」

「そりゃそうさ。大人になったら治安部隊に入るんだからね」

慶太が割って入る。

「明日見さん、だったな。あんたも、特に町中にいる時には気にかけてやってくれないか」
明日見は得心したと無言のまま頷く。

「さあ、一服したら、日が暮れる前に戻った方がいい。奴らが町外れまで付けて来るとは思わないが、夜は何かと物騒だからな」

「そうね。慶太、そろそろ帰ろう」

さすがの慶太も、二人組との予期せぬ遭遇を何とか無事に潜り抜けたばかりでは、公亮隊長の帰還を待つ為にもう少し粘る気は起きないようだ。

「源蔵さん、もう少し早く来れば公亮さんもいるんでしょう？」

「そうだな、朝、昼、夕の見回りの時間にはいない事もあるだろうから、その時間を外して来るといい」

*

明日見と慶太が治安部隊詰所を出た頃には、太陽は西の空に僅かに姿をのぞかせるのみとなり、空全体を覆っている真紅のベールも陰を増していた。

このままでは日没までに老師の元に戻れる見込みはなかったが、おぼろげに姿を現しつつあった上弦の月が夜道を照らしてくれるであろう事が、せめてもの慰めとなった。

街道は日が落ちるにつれていよいよ騒がしくなってきた。

街道沿いの店は、競う様に華やかなランプを店頭に灯して通行人の足元を照らしつつ、店の宣伝も兼ねているといった様相だ。

街道には仕事帰りの農夫と思しき人の群れや、一日の憂さを酒で晴らそうと居酒屋に繰り出す男達、そして、つかの間の逢瀬を楽しもうと寄り添う若い男女らが入り乱れ、かなり混雑していた。

そんな人の群れに混じって、駝（だ）を連れた旅人らしき人影も二～三見受けられる。

駝とは大型の鳥の一種なのだが、申し訳程度の翼しか生えていない為に、空を飛ぶ事ができないのだ。

その代わりに、一刻（約一時間）で十里（約五十キロ）を走破するとも言われる健脚の持ち主である為、飼い慣らして乗り物として使う者が多い。

四足の牛程の力はないが、敏捷かつ耐久性も高く、また使い勝手のよさから、乗用ばかりでなく荷車の牽引用として使われる事も珍しくはない。

そんな駝の行く手さえ遮る人の波を掻い潜りつつ、明日見と慶太は無言のまま家路を急いでいた。

「それにしても、今日はお祭りがある訳でもないのに、一体どうしたのかなあ？」

久しぶりに慶太が切り出したのは、人通りが絶え、街道の石畳が消えて店や家屋も見当たらなくなった町外れに差し掛かった頃だった。

「あんなに人がいるなんて、ちょっとびっくりしちゃった」

せいぜい人口が二～三百人の『天元堂』で人生の大半を過ごして来た明日見にとっては、それでも目を回す程の人の数だった。

慣れてしまえばどうという事もないのだが、例え慣れたとしても雑踏の中では何がしかの息苦しさを感じてしまうのは、明日見のこれまでの経験から培った感性のなせる業だ。

「でも、首都のパレードはその何十倍も混むみたいだから、きっと明日見なら息が出来なくなっちゃうね」

「何十倍？」

「クスクス。だって爺ちゃんがそういっていたからね」

慶太が子悪魔の様な意地悪い笑みを浮かべている。

「他にも、山の様に高い建物や、迷いの森の木と同じくらい沢山の家が建ってるんだって」

「慶太は、首都に行った事があるの？」

「僕はないけど……小さい頃の事は何も覚えていないし、気がついたら爺ちゃんと一緒にいたって感じで、後はずっとこの田舎町にいるよ」

「確か、慶太は小さい頃に老師に引き取られたんだったよね？ 『なぜ、老師に引き取られる事になったのか？』とか、その前の事とかを老師に聞いたりはしないの？」

「うーん。気がついた時は爺ちゃんと二人暮らしだったから、別に気にならなかったし、爺ちゃんも話してくれないしね。そりゃ、他の友達みたいに父ちゃんや母ちゃんがないのは寂しいなって気もするし、僕の父ちゃんや母ちゃんがどうしているかも気になるけど、爺ちゃんが話さないなら、父ちゃんとか母ちゃんとか気にしない方が良いんだって思う。爺ちゃんって、昔は偉い学者だったんだから、爺ちゃんの言っている事に間違いはないしね」

「ごめん。なんか変な事聞いちゃったね」

明日見は、最前代峰老師から『脇差の柄に刻まれた紋章は大乗家のものだ』という話を聞いて以降、心の奥底で自らの出自に関わる手がかりを得たと気になっていたものだから、慶太の余りにあっさりと割り切った反応が少々意外だった。

「でも、首都へ行ってみたいとは思うよ。それに治安部隊に入るには首都の兵学校治安科で三年間勉強して、治安部隊の入隊試験に合格しないとイケないから、後二年経って十五歳になったら、首都の兵学校へ行くんだ」

「治安部隊に憧れているだけなのかと思っていたけど、色々考えているんだ」

「うん。治安部隊に入ったらこの町に戻ってきて、爺ちゃんや町の人々が安心して暮らせる様に頑張るんだ。っていっても、この前源蔵さんが『幾ら希望しても、望み通りの勤務先に配属されるとは限らんぞ』と行ってたけどね」

「そっか、何事も成せばなるっていうからね。そういう前向きな気持ちは大切だと思うよ」

「……姉ちゃんは、いつまでも家にいる訳ではないんでしょ？」

慶太が唐突に話題を変える。

「昼間、爺ちゃんと石の事とか話していたでしょ？ 僕にはよく分からないんだけど、きっと姉ちゃんには何かやりたい事……目標みたいなものがちゃんとあって、もう歩き始めてるんだって思う。で、その目標の為に怪我して今は家にいるけど、また旅に出るのかなって。ねえ、姉ちゃんの目標って、何だか聞いてもいい？」

慶太の問いかけに、明日見はどう答えたものか少々戸惑った。

それは安易に口外してよい内容のものではなかったし、予め秘匿する様言い含められてもいた。

しかし、ここまでの経緯があるにも関わらず、懐いてくれている様な印象を受ける慶太に対して、余りむげに拒絶する気にもなれなかった。

それに、元々明日見は余り隠し事が好きな方ではないのだ。

「……うーん……一言で言うと、人探しかな」

「人探し？ 父ちゃんとか、母ちゃんとか？」

「父親の事は知らないし、母親もずっと昔に……多分死んじゃったんだと思う。そういうものとは違うけど、でも、大切な人、かな……」

「ふうん。もしかして、大切な人って……」

その時、道端の草陰から矢の様な殺気が飛び、明日見の鼻先を掠めていく。

反射的に出した掌の中に、殺気の正体が微かに衝撃の名残を残しつつ、こじんまりと収まっていた。

「石礫！」

明日見はすかさず身構え、周囲に全神経を集中させた。

間をおかずに頭上から黒い影が落下してくる。

ちょうど路肩に一本の大きな木が立っていたのだが、何者かがその木の枝に潜んでいたのだ。

「慶太！ 下がって！」

明日見は背後の慶太に向かって叫びつつ、一瞬早く頭上から襲撃する影の第一撃を交わし、更に影の着地の瞬間を狙って、足首の辺りに低い姿勢からの回し蹴りを叩き込む。

グハッ！

影は路上に横倒しになったまま、低くくぐもった呻き声を上げる。

聞き覚えのある声……そして、生理的嫌悪感を呼び覚ます三年ものの腐敗したニンニク臭……。

明日見の脳裏には、先程町中で絡まれた胡散臭い二人組の顔が浮かぶ。

すかさず今度は道端の草むらの陰から男が立ち上がる。

明日見は間髪をおかずに、先程手にした石礫を男の眉間目掛けて投げる。

とともに、ウギャ！ と悲鳴を残して、男は再び草むらの中に消えた。

「さて、なぜ私たちを付け狙うのか、正直に白状しなさい」

明日見は路上で蹲っている腐臭男に迫る。

腐臭男はよろよろと立ち上がるかと思いきや、虚をついて明日見に殴りかかる。

しかし、そんな見え透いた小細工が通用する明日見ではなかった。

軽快な足裁きで明日見が二度、三度と男のなまくらパンチを紙一重の差で避ける度に、男は大きく体が泳いでよろけそうになる。

そのまま軽く足を引っ掛ければ再び転倒してしまいそうな、これが襲撃されているのであれば失笑してしまいそうな程、男の足元がぐらついている。

逆に明日見が軽く二～三発拳を繰り出すと、面白い様に男の顔面に命中する。

これでは幾ら襲撃されたとはいえ、全く勝負にならない。

明日見は、勝負とばかりに男が繰り出したなまくらパンチを避けつつ足を引っ掛けると、やはり予想通り男は呆気なく頭から転倒した。

うつ伏せに転倒した男の左手首を掴み、男を地面に押し付けたまま後ろ手にして締め上げる。

男は堪らず悲鳴を上げるが、明日見は容赦なく締め上げ、男に左腕複雑骨折の恐怖を植え付けた上で一旦力を緩めた。

「さあ、なぜ私たちを付け狙うのか、素直に白状しなさい。白状しなければ、一生左腕が使えない体になるけど」

言いつつ、明日見は再びじわじわと力を加えて男の左腕を締め上げていく。

最初は歯を食いしばって耐えていた男だが、結局涙目になっている。

「ただ、慶太が前々から気に入らなかった事と、お、お前を襲ってやろうと思っただけだ。白状したんだからさっさと離せ！」

「そう。あんた達、他の女の子もこうやって襲っていたんじゃないの？」

「さ、三回目だ……さっさと離せ！」

男の声は悲鳴に近くなっている。

「それなら、今ここで約束しなさい。もう二度と私や慶太に付きまとわない事。そして夜中に女の子を襲ったりしない事。もし約束が守れなければ、今度は本当にあんたの腕をへし折るからね」

「わかった。わかったから離せ！」

男が明日見の要求を全面的に受け入れたと判断して、明日見は男の左腕を離した。

男は再び左腕を抱えて呻き声を漏らしている。

もしかしたら筋肉か腱、もしくは関節を痛めたのかも知れない。

「姉ちゃんすごいね！こんなに強いとは思わなかったよ」

勝負はついたと見たのか、慶太が明日見の傍らに近づいてくる。

「これで、当分は大人しくしてるでしょう。また付きまとって来る様なら、今度は本当に腕をへし折るしかなくなるけどね」

「僕も武術やろうかな？」

「でも、武術は本来人を痛めつける為の技ではないのだから、そこの所を勘違いしない様にしないとね。武術を使わないに越した事はないの。さあ、お爺さんが待ってるだろうから、早く帰ろう」

*

少し遅めの夕食は、最前の明日見の武勇伝を慶太がまくし立てるなど賑やかなものとなった。

明日見本人としては、むしろ少々手加減をしたにもかかわらず、余りに一方的な結果になってしまって、何か釈然としない思いが燦っていたのだが、慶太には明日見の心の内など知りようもなく、ただただ治安部隊にも匹敵する武術の使い手が目の前で大立ち回りを演じ、しかもそれが自分より幾つか年上でしかない女性だという事に対する、驚きと気分の高揚しかなかった。

代峰老師もあえて慶太に口を挟まず、努めて聞き役に徹している様だった。

老師の経歴から言っても、性格から言っても、争い事は好まないだろうから、明日見の大立ち回りの話を複雑な心境で受け止めていただろう。

しかし、老師は穏やかな表情を崩さず、静かに慶太の言葉に耳を傾けていた。

そうしてひとしきり明日見の大立ち回りの話が出尽くした頃、代峰老師がふと話題を切り替えた。

「ところで、町はどうだったかね？ 明日見」

「はい、色々勉強になりましたし、老師に色々お聞きしたい事もあります」

「ほう。聞きたい事とは、例えば、どのような事だね？」

「李朝金貨を巡る歴史的経緯について……」

「李朝金貨とはまた懐かしい……近代史は私の専門分野だ。かなり詳細な部分まで説明は出来るが、ほぼ李朝時代全般について解説するのと同じ事になってしまう。それは後日また時間をとるとして、他にはどのような事があるのかね？」

「では、首都について、また、治安部隊について……とにかく、私はこの国について余にも知らなさ過ぎるという事を知りました。ですから、この国の、出来れば他の国についても、老師の分かる限りのあらゆる事を教えていただきたいのです」

「うむ」

老師がふと考え込む。

明日見も元々はその様なつもりはなかったのだが、現在の下界の状況を余りに知らないのだと見せ付けられ、この決定的な知識の欠如は今後の明日見の活動に重大な支障を来す可能性がある、と、今日一日だけで認識していた。

老師に余りに頼ってしまう事には危険性もあったが、それ以前に最低限の知識を手に入れないければ身動きが取れない……というのが、今の明日見の自己分析だった。

ましてや国立学術院という学校で学問を修め、町でも尊敬の対象となっている様に見受けられる代峰老師なら、これ以上の適任はないといってよい。

そんな思いもあって、明日見はつい口を滑らしたというのが正直な所だった。

「それならば、本来なら学校に通うのがもっとも相応しいのだが、明日見には悠長に学校に通う気はないのだろうか？ そうであれば、わたしが個人教授しても良いが……つかぬ事を聞くが、読み書き計算は一通りこなせるのかね？」

「はい。計算は日常生活に支障がない程度なら、読み書きについては、帝記が普通に読める程度と言えば良いでしょうか」

「ちなみに今までに読んだ事のある帝記は？」

「蔡帝帝記、円帝帝記、霊帝帝記、幻帝帝記……まだ言いますか？」

「いや、結構だ。あの難解な幻帝帝記を読みこなすとは、なかなか。あれは専門の研究者でも骨が折れるものでね。とにかく読み書き計算は問題なくこなせるようだ。それならば、明日見の疑問点を随時解説するという方法が取れるだろう。かなり時間の節約にもなると思うが」

「では、それをお願い致します」

「それでは、こうしよう。今わたしは日替わりで町の学校の臨時教授をしているのだが、明日は学校へ行く日だから、学校へ行く日は昼から夕方まで、学校へ行かない日は朝から昼までを個人教授の時間としてはどうかね？」

「わかりました。それで、明日の朝は何をすればよいでしょうか」

「うむ。わたしが学校へ行っている間ならば、前日の講義の復習をするか、もしくは家の雑用を手伝ってもらえるとありがたいのだが、今朝意識が戻っての明日からでは、まだ勝手も分からないだろう。他に頼むべき事もないから、昼までの時間は自由に過ごすといい。午後からの講義の準備をしても良いし、この辺りを散策して回っても良いだろう」

「そうですか、では、自由にさせてもらいます」

慶太は二人のやり取りに入っていけずに、いち早く食後の後片付けを始めていた。

この家には元々老師と慶太の二人きりだったのだから、日々の雑用の役割分担は自然と行われていた。

慶太は料理など出来なかったから、必然的に食後の後片付けが慶太の分担という事になって、そのまま定着していた。

場合によっては老師が手伝う事もあったが、基本的に『決められた役割は責任を持って行なう』のが老師の教育方針だったから、特に最近ではほぼ慶太に任せていた。

慶太が食器を洗い終わるのを確認すると、老師が慶太に呼びかける。

「慶太、余り遅くならないうちに風呂に入って来なさい」

「あの、風呂なんてあるんですか？」

例え今朝まともに意識が回復したばかりとはいえ、このこじんまりした家に風呂らしき設備がない事は明日見にも一目瞭然であった。

それだけに、老師の言葉が少々意外だったのだ。

「すぐそばに温泉を利用した共同浴場があるのだよ。わたし達だけでなく、この界隈の住民は概ねその共同浴場を利用している」

「こんな所で温泉が出るのですか？」

明日見が不似の山にいる頃には、よく天然温泉の露天風呂を利用していた。

『黄泉路の癒し水』とも言われる温泉は、不似の山に限らず蓬萊の山々ではよく利用されていたが、幾ら不似の山に比較的近い土地とはいえ、中原地帯で温泉が出るという話は聞いた事がなかったのだ。

「その温泉は井戸を掘った時にたまたま出たのだがね。明日見も一緒に行ってくるといい」

「爺ちゃんが行かないの？」

「今日は遠慮しておこう」

「わかった。じゃあ、姉ちゃんさっさと行こうよ」

*

翌朝、地元の学校へ出かける老師と慶太を送り出した明日見は、武術の鍛錬の為の準備運動と、老師の慎ましい小屋の周辺の散策を兼ねて走る事にした。

昨日町で購入したお気に入りの上下を身にまとい、とりあえず迷いの森に向けて軽やかな足運びで近づいてゆく。

そのまま森の周囲に沿って半刻（約三十分）程進み、そろそろ引き返そうと足を止めた時、森の入り口近くから何物かを叩く音が聞こえてくる。

一、二、三、四、と心地よいリズムを刻んで響いては止み、しばらくしてまたリズムを刻むといった音に惹かれる様に、明日見は好奇心を刺激されて、一応用心しながらも森の中に分け入っていく。

明日見が六丈（約十メートル）程森に入った時、これまでリズム良く刻まれていた音がピタリと途絶えた。

「あれ？」

明日見が周囲に目を凝らして見回していると、折り重なった木に視界を遮られながらも、小屋らしき建物がチラリと目に入る。

そのまま小屋に向かって三十丈（約五十メートル）直線に突き進むと、いわゆる丸太小屋を中心とした庭の様な空間に出た。

丸太小屋の正面の、作業台と思しき頑丈そうな木製机の上で、何らかの木工品を一心に組み立てている大男がいた。

「あの」

男の背後から明日見が声をかけると、男は大げさなくらいビクッと背筋を震わせ、それから恐る恐る明日見の方を振り返った。

「ごめんなさい。脅かすつもりではなかったのだけど……」

「何だ？」

「何って程の事でもないけど、何かを叩く音が聞こえてきたから、何の音かな……と思って」

「ふーん、椅子、作ってる」

「椅子？」

男は、今組み上げたばかりの椅子を持ち上げて見せてくれた。

細かい仕上げの作業が残ってはいたが、とりあえず椅子の形には仕上がっている。

「器用なんだ……こういう、椅子とかを作ってるの？」

「椅子、机、棚、みんな作る。家も」

「家って、この丸太小屋も？」

男は無言のまま頷く。

「家まで作るなんて……」

「仕事……」

明日見が感心していると、男は作業台に椅子を残したまま席を立ち、一旦丸太小屋に入ったかと思うと扉から顔だけ出す。

「茶、飲む？」

「ありがとう」

男は一旦小屋に篋るが、その間に明日見が丸太小屋の周りを見て回っていると、男はわざわざ明日見の近くにまで歩み寄って来て、『来い、来い』と手招きする。

明日見は促されるままに丸太小屋に入り、男に勧められるままにテーブルに腰を落ち着けた。

小屋は決して広くはなかったが、木工品に関しては素人の明日身が見ても、天然木の素朴な味を見事に生かして丁寧に仕上げられた調度品の数々に、ただただ驚くばかりだった。

そんな明日見に、男が無言で木製の湯飲み茶碗を差し出す。

「ありがとう。あの、名前はなんていうの？ 私は明日見」

「あすみ？ 俺、精三」

「精三さんはここに一人で住んでいるの？」

精三は無言で頷き、茶を軽く啜る。

「あすみ？」

「私？ ああ、今は代峰老師の所でお世話になってるの」

「たい？」

「代峰老師……慶太君の所って言えば分かるかな？」

「慶太？ 慶太、友達」

「慶太は精三さんの友達なの？」

「うん」

精三がかぶりを振る。

「あすみ、慶太、友達？」

明日見はしばし間を置いて、

「そうね、慶太と友達……でいいと思う。昨日からだけだね」

「俺、慶太、友達。あすみ、慶太、友達。俺、あすみ？」

「つまり、精三さんも私と友達になりたいの？」

「うん、あすみ、いい人」

「ありがとう。精三さんこそ、こんなに素敵な椅子や机や、家まで作れちゃう、素朴でとても温かい人だと思うよ」

明日見がテーブル越しに両手を差し出す。

「精三さん、お友達同士の挨拶のしるしに握手しよう。よろしく」

それまでどちらかというと仏頂面で、殆ど表情の変化を見せなかった精三が、文字通り満面の笑みを溢して明日見の手を握り締めた。

長年の木工作業の末に節くれだった無骨な手が、やはり女性にしては少々頑丈な明日見の手を、壊れ物を扱う様に優しく包み込んだ。

*

明日見は、それからしばし精三と会話を交わし、普段こうやって作り溜めた木工品を時々町に持っていく事や、迷いの森が余り広がり過ぎない様に、適度に木を伐採して回るのも仕事だと言うような話を聞いた。

時々慶太が遊びに来て色々な話をする事なども聞いたが、慶太以外の人付き合いはない様だった。

明日見が『なぜこんな森の中に住んでいるの』と問い掛けても、精三は『森、好き。木、好き』としか答えなかった。

予想外に精三の丸太小屋に長時間滞在し、代峰老師と慶太が学校から戻る昼過ぎには老師の小屋に戻りたかった明日見は、別れを惜しむ精三を振り切る様にして丸太小屋を後にした。

帰りは、精三が自分の丸太小屋と森の入り口をつなぐ様に踏み固めた通路を伝って森を抜け、そのまま明日見は半刻（約三十分）程走り続けた。

老師の小屋に戻ると、既に老師と慶太は昼食を始めていた。

「明日見、一体どこへ行っていたのだね？」

と、やんわりとではあったが老師に問い詰められ、また慶太にも『遅刻遅刻う〜』とからかわれる始末であった。

『まあ、とにかく食べなさい』と老師に促されて、明日見は少し遅めの昼食を始め、木工職人で木こりの精三に出会った事を話し始めた。

「へえ〜。明日見、精三さんの所へ行ってきたんだ」

「行ってきた……というより、迷い込んだんだけどね」

「あはは。精三さんの家は迷いの森の入り口だからね」

「慶太のこと、友達だっていったよ」

「うん、友達だよ。そういえば、最近精三さんの所には行ってなかったなあ」

慶太は一足早く昼食を終え、既に後片付けに入っている。

「ねえ、爺ちゃん、食器洗うの任せていい？ 久しぶりに精三さんの所に行ってくるよ。明日見が食べ終わるのを待ってたら日が暮れちゃう」

「ああ、皿洗いは罰として明日見にやってもらうからな。それよりも、余り精三君の邪魔をせずに、早めに帰ってきなさい」

「はい。じゃ、いってきまーす」

慶太は風のように飛び出していった。

そうこうしているうちに老師も昼食を終えた様だ。

「老師、あの精三さんの事なんですが……」

「うむ、明日見の言いたい事は良く分かる。精三君はな、産まれつき頭が成長しない病を患っているのだよ」

「頭が成長しない病……ですか？」

「普通、人は体の成長に合わせて頭も成長する。もちろんしかるべき教育を施さなくてはならないのだが、適切な教育を施せば年齢と共に知識が身に付き、大人としての考え方が出来る様になる。しかし、精三君の場合は産まれつき物覚えが悪く、今でも多分七〜八歳程度の思考能力しかないのだろう。更に、言葉に障害があってな、殆ど片言くらいの会話しか出来ない」

「そうだったのですか。一応意思の疎通は出来たのですが……」

「一応理解はしている様なのだよ。しかし、元々物覚えが悪い上に言葉も片言しか喋れないで、本人もそうだが、親御さんもかなり苦労された様だ」

「あの、精三さんは一人で暮らしている様でしたが？」

「ああ、ちょうどわたしがここに移り住んだ頃、慶太を預かるほんの少し前だが、精三君の母親が相談に見えてね、学校の勉強について行けないから学校にも通わせてないといわれていた。その事でかなり苛められたり、親御さんも周囲から余り良くは見られていなかった様だ。そこで私が精三君の個人教授を引き受ける事になったのだが、その後すぐに慶太を預かる事になってしまって、個人教授を続ける訳にも行かなくなってしまった。しかし、そんな短い間でも、精三君が物作り……何かを組み立てる事にとっても熱心に取り組む事を知ってね。それで当時、木こりとしてこの森を管理していた老人に精三君を託して見たのだよ。五年程前にその老人もなくなってしまったが、今では立派な木工職人であり、木こりとしても頑張っている。その老人も当初は余り乗り気ではなかったのだが、精三君の物作りに対する資質を見抜くと、『筋がいい』『教え甲斐がある』と良く褒めていたのを思い出す」

「そんなことがあったんですか」

「私がここへ移り住む直前に精三君の父親は亡くされてね、母親も木こりの老人に精三君を託してしばらくして亡くなられた。しかし、母親にとっては、それまで生きる術を持たなかった息子が、木こりや木工職人として生きる可能性を見つけた時点で安堵された事だろう。ただし、学校などで苛められた記憶が精三君を人間不信に陥らせてしまってね、特に木こりの老人が亡くなった後には、わたしとも殆ど会う事はなくなってしまった。そんな中で、慶太だけが唯一精三君との人間関係を築く事が出来た。慶太は基本的にいつでも誰に対してもあの調子で、物怖じしないからな。精三君にとっても、慶太との付き合いは大きな影響があるのだろう」

「そういえば、私も、精三さんに友達になろうって、言われました。私と慶太が友達だって言ったら、僕も友達になりたいって」

「そうか、精三君が、明日見に……」

「ただ、なぜ一人で住んでいるの？ って聞いても、森が好きだからとしか答えなかった
ので、少し変だとは思ったんですけど、その様な気の毒な経緯があったのですね」

「大抵の人は、精三君の片言しか喋れない部分とか、物事の考え方が幼稚だとかといった
部分にしか目を向けられないから、仕方ないのかも知れないが」

「でも、これは精三さんにも言いましたけど、私は、とても温かい人なのだと思います」

＊

「では、明日見。少々慌しくなったが、第一回の講義を始めよう」

明日見が慌しく昼食を終えるのを待っていたかの様に、代峰老師は慣れた手つきで手早
く後片付けをし、テーブル越しに明日見と向かい合った。

「でも、皿洗いがまだ……」

「皿洗いは、夕食の支度の時でも構わないだろう。一緒に夕食の支度を手伝ってもらうの
も良い。それよりも、明日見は一刻も早く知識を習得したいのだろう？」

「はい、では、お願いいたします」

「その前に……」

老師がテーブルの脇においていた学習帖を明日見に差し出す。

「学校で使用している学習帖と鉛筆を分けてもらってきた。覚えるべき事は書いて覚えた
方が良い」

「はい」

明日見は鉛筆を使うのが始めてだった。

とりあえず学習帖の最初のページを開き、表紙の裏で鉛筆の書き心地を確かめる。

「あの、鉛筆とは、なかなか筆の様にはうまく書けないものですね」

「筆とはな。わたしが趣味で歌を詠む時の筆ならあるが、今から準備をするのも手間がか
かる。それに、今鉛筆に慣れておくのもよいだろう。貸してみなさい」

老師の手の中で鉛筆は自由自在に文字を描いていた。

「それに、鉛筆の良い所は、間違いの修正が手軽という所にある。鉛筆を知らないなら、
消しゴムも知らなかつた」

老師が消しゴムと言った白い塊を鉛筆書きの文字に沿わせて擦ると、白い塊から白いゴ
ミのような物が零れ落ち、それと共に文字が消えている。

「なるほど。鉛筆と消しゴムとは、何と便利な物なのですね」

「書き心地は慣れてもらうしかあるまい。さて、この様なことで時間を潰す訳にも行かな
いから、早速本題に入ろう」

「では、改めて、よろしくお願いいたします」

明日見が一旦鉛筆を置き、対面する老師に軽く一礼する。

「それでは、今日の講義は、李朝金貨をめぐる歴史的経緯について話そう。講義の本題に入
る前に、なぜ李朝金貨について知りたいのか、それを教えてもらえないかね？」

「はい」

明日見は上着の隠しポケットから布袋を取り出し、無造作にその中から二～三枚の金貨を掴んでテーブルに置いた。

「これは、ある方より授かった金貨です。申し訳ありませんが、誰から貰ったかと言う事はお話出来ません。しかし、故あってある方にいただいたものです。昨日、その金貨で買い物をしようとした所、その金貨では一般に通用しない事を知りました」

明日見は、昨日衣料品店で、この金貨は一般の通貨として使用できないと知った事、質屋で両替する事になり、質屋からこの金貨は李朝金貨であると聞いた事などをかいつまんで説明した。

「ほう、これはまた、珍しい。それで、李朝金貨という事かね？」

「はい、それから、出来ましたら、質屋の店主についても、何かお分かりになる事があれば、教えていただけないでしょうか」

「大体の事情は了解した。さあ、しまってくれたまえ」

明日見が無言のまま金貨を再び懐の隠しポケットに納める。

「では、まず簡単に終わる方から済ましてしまおう。質屋の店主だが、聞く所によると、昔は探検士として世界中の遺跡や秘境探検などをしていた様だ。しかし、何らかの事情から探検士を廃業する事になったのだろう。元々探検士とは様々な宝物類に対する知識が豊富であり、宝物の価値判断が適切である事を求められるので、その知識なり経験は質屋にうってつけという事なのだろう。また、探検士は常に命の危険に晒される職業でもある。だからこそ、それなりの知識と財産を手に入れた時点で転職する者も少なくないのだそうだ。当然、質屋なら職業上李朝金貨に関する知識があっても何ら問題はあるまい」

「では、何かと訳知り顔をしていたのは、探検士時代の経験もあるのでしょうかね」

「探検士時代かどうかはわからないが、明日見が李朝金貨を使おうとしていた事自体、未だに李朝金貨を記憶に留めている者からすれば、とても奇妙かつ苛立たしくもおぞましい事と見えてしまうのだよ」

「そういうものなののでしょうか。わたしにはそれが良くわかりません」

「これまで明日見がどこでどの様な生活を送って来たのかはわからぬが、様々な時代の帝記を読みこなしていながら、李朝時代や現代についての知識は欠如している様に見える。まるで、それこそ時をも越えるという神話時代の伝説の竜神にでも乗って、李朝成立以前の時代から時を越えて飛んで来たのではないかと思う位だ」

無論、明日見はこれまでと同じく、自らの素性に触れる事には一切答える訳にも行かず、沈黙したまま老師が話を進めてくれるのを待つしかなかった。

「もっとも、李朝があのような形で瓦解してしまった為に、未だ正式な李帝帝記は編纂されずにいるのだから、わたしの様な一部の研究者以外に、李朝時代の真実は殆ど知らされておらぬのだが……失礼」

老師は一旦席を立ち、飲み水用の汲み置きの桶から水を一杯柄杓で掬うと、口元の渴きを鎮める様に水を含んだ。

「失礼……では、続けよう。まず、李朝時代に入る前に、李帝と最後まで覇を競った撰晶（そんしょう）との攻防辺りから話すのがよいだろう。二百六十年余続いた先代の慧（けい）帝が倒れ、その後十年帝位が空位の時期が続いた時、再び世界を一つの帝で束ねようという動きが起こった。大抵帝が倒れた後の空位の時代は、当初各地の領主である州侯が一定の自治を確保していたとしても、数年のうちには戦乱に突入し、数年の戦乱を経て世界が戦に疲れた頃に、帝の器持つ者が現れて世界を束ねるとというのが、歴史的に何度も繰り返した事例だとされている。もちろん、世界の歴史を辿るのは公式の歴史書とされる各帝記と、帝記に付随する異聞録が主な資料となるから、時の帝の対立勢力の事情は伝わりにくく、ましてや先の帝が倒れてから次の帝の器を持つ人物が歴史上に登場するまでの間は、空白の期間として放置されるのが歴史学の基本姿勢となっていた。なぜなら、次の帝の器を持つ者が現れる以前は、歴史的には価値のない混乱時代と受け止められているからだ。しかし、李帝と撰晶を巡る攻防については例外だった。李帝の名は頂翌（ちょうよく）というのだが、頂翌と撰晶は共に慧帝の重臣であり、頂翌は慧朝末期に多発した反乱の鎮圧に武の要として各地に転戦し、逆に撰晶は宮城（きゅうじょう）に合って政務の要として政治改革による慧朝維持に奔走するという、まさに慧朝最末期を代表する文武の英雄とってよいだろう」

「あの、撰晶とは、昨日話していただいた、私の脇差に描かれた紋章の、大乘家が付き従った人物でしたよね？」

「うむ。それで、頂翌とは武の要だけあってどちらかといえば霸道思考の人物であり、一方撰晶はこれまでにない新しい帝政を目指す開明的な人であった。慧朝崩壊当初から、次の帝は頂翌か撰晶かと世間では噂されていたから、必然的に頂翌と撰晶が各地の諸侯の支持を集めていった。しかし、どちらかといえば武に秀でてはいても、同時に気性の荒さでも名を馳せていた頂翌は、諸侯の支持という点では劣勢に立たされていた。ただし、頂翌はその時点で自分の所領に加えて、慧朝時代からの勅軍も引き続き統括していたから、武力では双方互角とも言われていた。撰晶陣営は無用の争いを避ける為に、三度に渡って頂翌陣営に『宮城で諸侯会議を実施し、諸侯の総意を持って帝位継承候補を定めよう』と申し入れたが、頂翌陣営はいずれも拒否、大地を二分した大戦が行なわれる可能性が濃厚となった。ところで、明日見は帝位継承がどのようにして行なわれるか、知っているかね？」

「まず、帝位継承の資格となる帝の器を持つ者ですが、これは乱世を制して諸州を束ねる事自体によって、まず統治者としての能力を問われると思います。乱世を治められない様では、長期間帝政を維持する能力に欠けると見なされるからです。それからもう一つは、帝の住まいである宮城にあるといわれる天啓の間で、天界を統べる天帝から帝位継承承認を受ける為の儀式を行なうといえます。帝位に付くとは天帝との契約によって下界諸州の統括を代行する事を指しますから、天帝の承認が下りなければ帝位に付く事は叶いません。天帝の承認が下りると、下界諸州の州城にやはり置かれている天啓の間に、帝位継承の旨が告知されるといいます」

「うむ、よく帝記を読み込んでいる様だ。それで、本来ならば今明日見が述べた手続きを踏んで帝位継承となるのだが、李帝の場合は少々事情が異なるのだよ」

「事情が違ふといひますと、李帝が帝位を僭称したとか、不正な手段で帝位を篡奪したという事でしょうか？」

「うむ、一応正規の手続きで帝位継承してはいるのだが、他の諸侯から見れば不正と取られても仕方のない手段で帝位を継承している。つまり、頂翌と撰晶とで、どちらを帝位継承候補とするかが諸侯の間で明確にならないうちに、頂翌が独断で宮城の天啓の間で帝位継承の儀を終え、天帝の承認を得てしまったのだよ」

「それは、一体どういう事でしょうか？」

「頂翌は一応正規の手続きを踏んで帝位継承資格を得たものの、諸侯はその様な事態に納得は出来まい。特に撰晶側についた諸侯からは『前例を全く無視した不正な手段だ』と非難の声があがった。しかし、天帝が一度承認してしまった以上、頂翌は帝位に付き、頂翌に反発する者は逆賊として討たれる道しか残されなかった。天帝が誤りを犯すなど考えられぬのだからな。頂翌は即座に『撰晶を逆賊として討伐する』と諸州に向けて布告、それまで撰晶側に与していた諸州が二の足を踏む中、頂翌は李帝として撰晶始め一族郎党五千余名の首を刎ねたそうだ。そして、諸侯が二の足を踏む中、唯一撰晶の守護として先頭に立った地方豪族大乘家当主の弦由（げんゆう）始めその一族も根絶やしにされたと聞く」

「根絶やし……ですか」

「うむ。明日見がその脇差をどの様な手段で入手したのかは知らぬが、もし古くからの慣習にある様に母から受け継いだ脇差であるのならば、明日見は李帝の手を逃れて大乘家の血を受け継ぐ数少ない生き残りなのかも知れぬ。だとすれば、李帝こそ一族を殺めた仇……という事になる」

明日見は心の奥底に熱く燃え上がるものを感じていた。

しかし、母親の記憶が殆ど残されていない明日見にとっては、唯一身元を証明する物がその脇差だったとしても、すぐさま『私は大乘家の数少ない生き残り』と言う風に感情が向かないのもまた事実だった。

何しろ、この脇差を母から託された記憶自体が、長い間頭の奥底に封印されたままにいたのだから。

「さて、少々遠回りをしたが、これからが李朝金貨にまつわる歴史的経緯の本題になる。何しろ帝の直轄領を含む中原十七州のうち、半数を遥かに超える十二州の州侯が撰晶に組する反李帝派だったのだから、核となる撰晶を討ったとはいえ気の抜けない日の続いていた李帝は、諸侯に対して『財政逼迫の為』と称して金百貫（重さの単位：約百キログラム）の抛出を要請した。金といっても諸侯が独自に貯蓄している金といえば金貨くらいしかない。また諸州の経済状態にも格差があったから、富裕な他の州から借財をしてまで金百貫を調達した州もあったという。一方、元々頂翌に与した諸侯は、抛出する金を五十貫に減免されたそうだ。そうしてかき集めた大量の金を元手に、李帝は通貨改革を行なう。慧帝時代までに使用されていた一分金貨を溶かして、半分の重さの一分金貨を二枚発行するという手法で、労せずして集めた金貨の価値を二倍に増やした。更に、その翌年より五年計画で『従来の金貨を廃止、それ以降李朝金貨以外の金貨を流通させた者は私財没収に処す』旨の布告が発

布された。諸侯は李帝に抗議の声を上げるが、明確に叛旗を翻して朝敵となる事を恐れて矛を収める。撰晶一族の衝撃的な運命が鮮明に記憶に残っていたから、李帝と安易に事を構えられなかった。無論、相手は帝ゆえ、朝敵となれば李帝の側に理がある事になってしまうという理由もあった」

「老師、質問があるのですが、よろしいですか？」

「何かね？」

「老師のお話を聞く限りでは、李帝に帝としての器があるとは感じられません。仮に一旦天帝が李帝の皇位継承を承認したとしても、お話のような状況では早晚退位させられてしかるべきです。お話の段階では、まだ李朝成立から一～二年しか経っておりません」

「うむ。明日見の言わんとする事はわかる。しかし、まずは話を続けよう。それで、諸侯は一旦矛を収めたのだが、一方、李帝に対抗するには諸侯の連携と時期を見る事が必要だとして、極秘裏に李帝追討の動きが始まった。他方、李帝派にも動きが出ていた。李帝は李帝派諸侯の管轄州に幾つもの精鍊所を作り始めていた。諸侯から金の拠出を強制する事で莫大な財源を確保する一方、自陣営の諸侯にはそういった施設を設置する事で資金を還流させ、諸侯の支持を繋ぎ止める為だ。精鍊所で作られるのは、もちろん反李帝派諸侯を蹂躪する為に必要な武器だ。当初は、李帝派の計画はうまく運んでいる様に見えた。しかし、李帝派の計画に綻びが見え始めたのは、李朝暦九年の大飢饉だった。ところで、明日見は通常の税配分を知っているかね？」

「はい。通常でしたら五公五民という様に、収穫物の五割は庶民の、五割は税として収める分です。そのうちの二割は帝に上納し、三割は各州侯に納めます」

「うむ、もちろん、帝や各州侯に納める分には、飢饉に備えての備蓄分も含まれており、庶民の生活が困窮を極める場合は、租税を減免したり、場合によっては庶民救済に使わなくてはならない。しかし、李帝は備蓄分を放出せず、きっちり二割の納付を各州侯に求めてきた。中には例年の収穫量の五割にも満たず、他州の救済によって辛うじてその年を凌いだ州もあったと言う事だ。先程、極秘裏に李帝追討の動きが始まったと述べたが、そういった反李帝派の連携がこの時に活きたと言う事らしい。反李帝派諸侯は、この飢饉をきっかけに李朝打倒に向けた具体的な準備に取り掛かったと言われている。一方、李帝派陣営でも飢饉の影響は大きかったと言う。元々精鍊所の建設・稼動に多くの人材を割かれていた上、精鍊所の稼動に要する大量の木材の伐採にも多くの人員が割かれていた為、この数年で農業従事者が大幅に減少していたのだ。その様な状況では、通常の年でも満足に税として割り当てられている分の農産物を納付出来る筈がない。そこで、帝が不足分を補填していたのだが、飢饉の到来で帝の貯蔵庫も底を尽きた為、二割納付厳守の勅命が出されたと言う事だ。もちろん、きっちり二割を納付したのは反李帝派諸侯だけである事は言うまでもない。そして翌年、各州侯当てに徴用令が発布される。初等学校を卒業した十五歳以上三十歳以下の男子を、各州の人口比に応じて述べ年間に百分の一を下限として、精鍊所稼動関連作業に従事する事とされた。各人の徴用期間は三ヶ月とされた。これは、李帝派諸州の精鍊所稼動に伴う負担軽減の為に考案された。一旦低下した農業従事者数回復及び、それにより減少した精鍊所作

業員の補填が目的だ。反李帝派諸侯は李帝のやり方に憤りを覚えていたが、同時に好機とも捉えていた。精錬所への潜入で自陣営に武器を横流しし、決起に備えて武力の均衡化が図れる事、決起に当たって敵陣営内部で騒動を起こす事で、自陣営を優位な状況に導けることが見込まれたからだ。なお、李朝唯一の英雄と言われた千騎將軍豪升（こうしょう）が、この頃反李帝陣営に内通し、武器の横流しや李帝陣営の内情把握に尽力したと言われている…」

そこで、代峰老師が思わず口ごもる。

「あの、老師」

「豪升將軍は、わたしの旧友の父上なのだよ。わたしにも、なぜあの方が李帝の理不尽な振る舞いを知りつつ、しかも裏では敵陣営とつながりつつも、尚あの愚かな李帝の盾となったのか、今なお理解が出来ない。明日見、昨日私は奇石を一度だけ手にした事があると言ったが、その持ち主が豪升將軍なのだよ」

普段はどこか悟り切った様な、常に冷静沈着な代峰老師が、いつになく少々気持ちが高ぶっている様だった。

「老師……」

しばし沈黙の時間が過ぎ、気持ちの高ぶりを強引に押さえ込んだ老師が言葉を継ぐ。

「もう少しだから、すべてを話してしまおう。かくして、運命の時間が訪れる。李朝暦十二年の秋、農作物の収穫を終え、年に一度の納税の時期の直前に、反李帝派の十二諸侯は連名で李帝に通告した。『本日を持って李朝の庇護下を離れて独立する』と。当然ながら李帝は激怒し、すぐさま討伐軍を派遣したものの、迎え撃つ独立軍とろくに矛を合わせる間もなく後退する。かねてから仕組んでいた様に、精錬所への徴用者達が騒ぎを起こしていたのだ。予めこの時期の徴用者には多くの騎士や兵士を紛れ込ませており、一般庶民は騒ぎを起こす直前に退避させておくという用意周到な作戦だった。結局李帝の討伐軍は背後の騒動の鎮圧に時間を取られ、独立軍と矛を交える機会を失ってしまった。そのまま年が明け、春になると李帝陣営諸州は深刻な食糧不足に見舞われて呆気なく瓦解した。その後程なく李帝は命を落として、李朝も廃絶となった。しかし、未だに頂翌の後胤が李朝の後継者を自称して帝の宮城と直轄領を占拠していると聞く。もう諸州はどれも相手にしてはいないのだがな。一方、独立十二州は互いに不戦協定と通商条約を締結し、各州がそれぞれ国家として立つ事になった。そのうちの二州は程なく合併し、一つの国家として、これまでにない新しい国家体制を敷く事にしたのだよ。それがこの国、東晶（ひがししょう）共和国だ」

「東晶共和国？」

「そう。中原地帯の東にある、撰晶の理想を目指した国家だ。これ以降は、また明日にでも話してあげよう。そろそろ慶太も戻ってくるだろうから、その前に茶でも入れて一服しよう」

そうやって老師が立ち上がった途端に扉が勢い良く開き、最前の噂通りに慶太が『ただいま！』と駆け込んでくる。

「ねえねえ、明日見！ 精三さんがさ、明日見の事がとっても好き！ って言ってたよ。また明日来て欲しいって！」

＊

先日引き続き、共同浴場の温泉で一日の疲れを洗い流した明日見は、老師や慶太としばし歓談した後、早々に二人の元を後にした。

今のところは、先日まで明日見が寝かされていた部屋をそのままあてがわれている。

夏場は風通しが良くて心地よさそうだが、冬場は凍えて凍死しそうな簡易寝台に、所々傷ついてささくれ立った机と椅子、それに、何が入っているのかわからない大きな木箱。

それが、この部屋に元々あった物の全てだった。

今は、それに加えて明日見の荷物一式が詰め込まれている布袋が一つ、木箱の上に無造作に置きっぱなしになっている。

明日見は、老師に借りていたランプに無造作に灯りを点し、昼間老師から受けた講義の内容を思い出しつつ、学習帖のページをペラペラとめくり返していた。

「李朝金貨……か。確かに歴史的な経緯を聞けば、李帝の暴政は李朝金貨と共に始まったのだし、李朝金貨が反李帝派諸州の富を奪り取ったのだから、目の敵にされても仕方がない……か。それにしても、独立派十二州がそれぞれ国家として独立すると言うのは、どうなんだろう。戦が起きていなければ戦乱とは言わないけど、下界が分裂したままなんて……。そのうちの二州が合併して東晶共和国になって、でもそれは新しい国の形を目指しているなんて、そんな、帝のいない国なんて、在ってもいいのだろうか？」

ふと、明日見は荷物の詰まった布袋を漁り、母の形見として残された脇差を手に取り、複雑な装飾を施された紋章を見る。

「しかも、その新しい国の形を目指していた人を、最後まで盾になって守った人が、もしかしたら私のお爺ちゃんか、曾お爺ちゃんかも知れないなんて……」

無意識のうちに、明日見の頬を一筋の涙が伝っていた。

「……これまたおセンチな気分とはな、明日見にしては珍しい事があるものよ。ホルホルホル」

その聞き覚えのある声に明日見は慌てて涙を拭い、全神経を室内の至る所に集中させる。

「なんじゃ、わしが出て来ただけでそんなに尖がりおって、ほんにつれないのお」

また、あの酔狂な物の怪が、ランプのちょうど真上に首だけの姿で現れた。

「たまには、わしの前でもかわゆい笑顔でお出迎えしようとか、そういう女子らしいきめ細やかなサービス精神というものが欠けておるのか、おぬしは……老い先短い年寄りはいたわるものぞ」

「何を言うか物の怪が！ 如何わしい詐欺師風情に安売りする笑顔など、私は持ち合わせていない！」

「これこれ、そうしかめっ面ばかりしていると、そのうちこわーい鬼の顔になってしまうぞ。ところで、今日はおぬし、あの爺さんに色々話を聞いたようじゃの」

「それがどうした？」

「本当にあの爺さんの言を容易く信用してよいものかのう……と思うてな」

「その様な事、お前の様な物の怪に言われるまでもない」

「果たしてそうかのう。あの爺さん、そうやって明日見を信用させてから騙すのかもしれない。そういう手法が得意な詐欺師かも知れぬぞ」

「老師がわざわざ一週間も私を看病してくれた上に、仮の寝床も提供してくれて、更に貴重な時間を割いて個人教授まで引き受けて下さるのだ。その老師が私を騙すなど、有り得ない」

「そうかのう……例えばおぬしに何か高い関心を抱いておるとか、その、おぬしの持ち物とか……」

「石か？」

「そうじゃ、石じゃ！ 爺さんは石に強い関心を示しておったのう。爺さんはおぬしを信用させて警戒を解かせた上で、悠々と石を奪うつもりかも知れぬぞ」

「ふん。老師にその様な意図は毛頭無い。第一、老師にその様な意図があったのなら、私が身動きの取れなかった一週間の間にどうしても出来た筈だ。しかし、老師は石をきちんと返してくれたのだぞ。大体、あれは良く考えれば単に預かってくれていただけだ。それをお前の下らぬ戯言に乗って、危うく慶太の腕をへし折りかけるなんて……。お前は昨日の事をもう忘れたのか」

「まあ、あれはわしの取り越し苦労かも知れぬが、そのおかげで石が無事だったのだから、結果的にはよかったではないか。あの時の明日見の行動が、あの爺さんの如何わしき意図を一時的に止めたのかも知れぬぞ」

「まだ言うか！ 老師に如何わしき意図など微塵も無い。これ以上その様な世迷言に付き合うつもりは無い。さっさと失せろ」

明日見は、これ以上物の怪の妄言に関わってははいられないとばかりに会話を打ち切り、そのままランプを消して簡易寝台の薄い上掛けの中に潜り込んだ。

「のう、明日見よ。その様につれなくする事は無いではないか。……取って置きの情報があるのじゃがな。おぬしも東晶（ひがししょう）共和国建国の事情を聞いておるのじゃろう？

東晶共和国はおぬしとあながち無縁ではないのじゃよ。しかも、首都近郊にはおぬしの血縁かも知れぬ大乘家が代々治めてきた土地がある。そこへ行けば、まだ見ぬおぬしの血族との再会が果たされるやも知れぬの。更に、あの童は……」

「うるさい。お前の戯言に付き合う時間はもう終わりだ。私はもう寝るのだから、邪魔をするな」

「そうか、おぬしがそこまでわしにつれない理由はこれじゃろ。おぬし、あの木こりの男に愛の告白をされた様じゃが、実はおぬしもまんざらではないのではないのか？ しかし、あの様な見るからにとろそうで冴えない男のどこが良いのかのう。女心とは実に摩訶不思議……」

「お前に精三さんの良さが見えないのは、パッと見て目に入る部分しか見ようとしなからだ。それ以前に、今の私には好きだ嫌いだと浮かれた恋愛ゴッコに興じている余裕は無い。下種の勘ぐりはいい加減にしたらどうだ」

「ほう、果たして本心はどうなのかのう。あの木こりで無いとすれば、ほれ、『不似の山』に残してきたあの男、あの男の事が、今でも忘れられずに、夜中に一人身悶えしているのではないのかのう。キルキルキル」

「辰巳（たつみ）はそんな！」

こんな所で意外な名前が出てきた為、思わず明日見は飛び起きた。

「そうそう、確かそんな名前だったのう、キックキックキック！」

明日見がこれまでに聞いた事も無い、下卑た笑いの余韻を残して、ふと物の怪の気配が消えた。

なぜあの物の怪は執拗に明日見に付きまとい、憎まれ口を叩いては明日見をいらだたせると言った行動を繰り返すのだろうか。

当面生命の危険は及ばないと思えるが、明日見にとっては常に後味の悪い不快感を催させる、詐欺師的な狡賢さを臭わせた物の怪だった。

今の所は大した実害は無いものの、余りに度が過ぎる様であれば、何らかの対策を講じる必要があるかも知れない……と密かに思う明日見だった。

それにしても、偶然とはいえこの様な所で辰巳の名前が出るとは、明日見にとっては少々意外な展開だった。

辰巳は、明日見と同じ不似の山の『天元堂』の修行者で、明日見にとっては兄とも、幼馴染とも言える人物だ。

「辰巳か……。そういえば、辰巳や、みんなは、今頃どうしているんだろう。元気にしているかな」

思い返してみれば、明日見が不似の山を降りてから、もうすぐひと月が経過する。

夏の盛りだと思っていた季節も、そろそろ実りの秋に主役の座を明渡すべく、そそくさと身支度を始めている……そんな晩夏の一夜だった。

＊

明日見が学習帖と鉛筆を手に代峰老師の小屋の扉を開けると、老師は朝食後の一服と、これから始まる講義に備えて喉を潤す為、自分と明日見用に茶を入れている所だった。

「申し訳ありません、老師。急かすようになってしまって……」

「明日見の顔に『早く講義を受けたい』と書いてあるのでな。意欲のある学徒を放っておける講師はおらぬよ。必要な知識を早く吸収して、旅に出たいのだろう？」

明日見は言葉に詰まった。

自分では決してあからさまな態度を見せているつもりは無いのだが、どうやら老師には見るからにそう映るらしい。

もっとも、一昨日の状況からすれば、『一刻も早く旅を再開しなくては……』と気負った明日見の心の内を推し量るのは難しい事ではなかった。

「ははっ。構わぬよ。明日見がわたしや慶太を嫌っている訳ではない事はわかる。そうだな……明日見は、何かの使命感に駆られている様に見える……それは、きっと明日見にとっては大切な事なのだろう」

二人は昨日同様テーブル越しに対面し、老師が傍らの湯飲み茶碗に口をつけた。

「それでは、今日の講義を始めよう。昨日は、李朝成立から東晶共和国建国までの大まかな流れを追った訳だが、今日の講義内容について明日見から何か要望はあるかな？」

「老師は、中原地帯の地図をお持ちでしょうか？ 出来れば、地図を見ながら各地の現状についてお話頂きたいのですが」

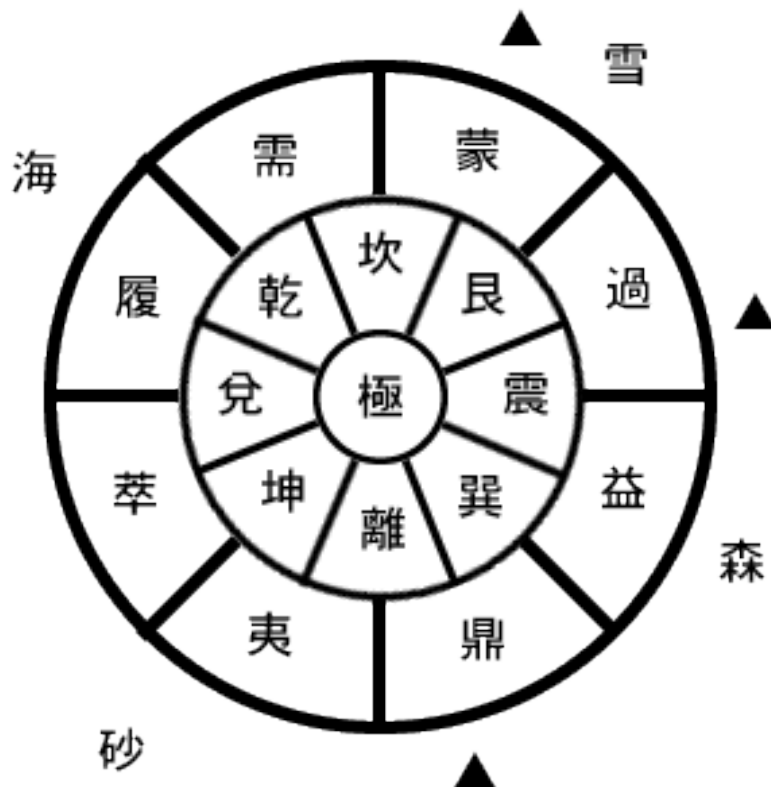
「うむ、地図はあるにはあったと思うが、この地に移り住んで以来、地図を開く用も無いのでな、今すぐと言う訳にはいかないが……町役場の書庫に行けば最新地図が閲覧出来ると思うが、あるいは町の書店にもあるかも知れぬ」

「そうですか……」

「明日見には、後で洗濯を頼もうと思ったのだが、それを終わらせたなら町役場に行ってみると良い。それまでは……とりあえず学習帖を貸してみなさい」

明日見が老師に学習帖を渡すと、老師が真新しいページにスラスラと何かの絵を書き始めた。

「老師、それは……？」



「中原地帯の地図を簡単に書くとこの様になる。とりあえずこれを見ながら、各国の状況について簡単に説明しよう。その上で、より詳しい説明が必要であれば、その都度応じると言う事でよろしいかね？」

「お願いします」

「では、最初に明日見に聞いておきたいのだが、中原十七州の名称がどの様につけられているのかは、知っているかね？」

「はい、世界を統べる天界の神々の長である天帝が、この世界の理を定められた時に、天界に生じる全ての現象を八つの状態に分類し、その影響を受ける下界の森羅万象を六十四の状態に分類したと言います。その内、中原の中心である帝の直轄領を、太極を示す極（きょく）州とし、その周囲にある各州はそれぞれの方位を示す状態の意をその名にしたと聞きます」

「うむ、結構。それで、ここは州名で言えば過（か）州となり、過州と震（しん）州の二州が東晶共和国を構成している。ちなみに、未だに李帝の後継を名乗る愚かな頂翌（ちょうよく）の後胤……確か頂漸（ちょうぜん）といったか……の治めるのが極州と離（り）州、旧李帝派はそれに巽（そん）州、鼎（てい）州、夷（い）州が加わる。そして、過州の東と、蒙（もう）州の北、鼎州の南にあるのが蓬莱山だ。そして、蒙州の北は雪に閉ざされ、過州から益（えき）州にかけての東は迷いの森が一面を覆い、夷州の南は広大な砂漠地帯となっている。また、履（り）州の西側には一面潮の水で満たされた海があって、それらの先はいずれも人跡未踏の地であり、稀に命知らずの探検士が足を踏み入れる以外には、人が中原を離れたとの記録は無い。そもそも、天帝より人の住まう土地として中原が与えられたのだから、それ以外の土地が人の住む様に出来ていなくとも頷けるだろう。なお、履州西方の海の彼方には常世（とこよ）の国があり、そこに第四の蓬莱山が聳えているとの逸話もあるが、誰も確かめた者は無い。そもそも常世の国とは人が死後に訪れる国の事なのだから、死者が生者の国に戻る道理が無い以上、確認のしようも無い」

老師が一旦言葉を止め、湯飲み茶碗を口につけて喉を潤してから更に続ける。

「それで、李朝崩壊後の独立十二州のうち、東晶共和国を除いた十州は各州の州名をそのまま国名としている。例えば益州なら益州国、良（ごん）州は良州国といった具合だ。旧李帝派の巽州等は、名称は巽州のままで実質州侯が統治している状態だ。昨日の話からも言える事だが、李帝の暴政の失敗を受けて、特に旧李帝派諸州と、それに隣接する諸国は国家の運営が余りうまくいっているとはいえない。もちろん我が東晶共和国は極州、巽州に隣接してはいるものの、過州と震州合併の影響による余力が大きい為、例外的に国家運営は順調に運んでいる。しかし、それ以外の極州に隣接する各州や、益州、そして萃（すい）州には、旧李帝派各州から訪れる難民問題や、難民らが原因となる治安悪化、更には、独立十二州はこれまでも旧李帝派各州への食糧援助を中心とした支援策を継続的に実施しているのだが、国家運営が芳しくない諸国にとっては、それらの負担もかなりの重荷となっている様だ」

「あの、独立十二州が行なっている食糧援助ですが、それは極州や離州に対しても行なわれているのでしょうか？」

「独立十二州側としては援助の実施を打診しているのだが、頂漸が拒否したまま難民の発生を放置しているのが現状だ。以前は難民押さえ込みの為の取り締まりも行なわれていたのだが、現在はそれも行なわれていない。一時期は難民の流入阻止の為に国境封鎖を実施した事のある、極州に隣接する諸国も、一度国境付近で大規模な暴動が発生して以来、規制しつつも何らかの形で難民を受け入れざるを得ない状況に陥っている。難民は食い詰めて今日の食料を求めて国境に殺到しているのだから、難民自身の否を責めるのは酷と言うものだ。しかし、そうして運良く越境出来たとしてもすぐに生活が安定する訳ではなく、更にはかつての敵同士といった複雑な感情も絡み合って、将来に絶望した難民が犯罪に手を染めると言ったケースも少なくないそうだ。究極的には頂漸を極州、離州から排除する以外に解決法は無いのだろうが、武力なくしてその達成は難しく、かといって一度独立国家としての体制が出来上がってしまったものを、下手に武力行使に及んで力の均衡状態を崩し、戦乱の引き金を引きたくはない……と言う思いもあるだろう。結局、一時的な弥縫策を小刻みに繰り返すだけで、じりじりと状況が悪化しているといった状況だ」

「独立十二州のうちの、難民の影響を受けていない諸国はどうしているのですか？ それらの国にはまだ余裕があるのでしょうか、そういった国々でも難民の受け入れを促進するとか、それらの国々が主導的に頂漸を討って、再び帝を立てて統一するといった事は出来ないのでしょうか？」

「それも今は難しかろう。一応去年の十一国会議で、難民の受け入れを行なっている諸国は、今年の秋から巽州ら三州向けの支援物資調達を免除される事に決まったが、減少する気配の見えない難民への対応を巡って会議は紛糾し、これまで鋼の信頼で結ばれていた独立十二州の分裂が決定的になってしまった。秋に行なわれる予定の今年の十一国会議は、今の所開催の目処が立っていないそうだ。それに、様々な問題が残されているとはいえ、十一カ国が成立してから、既に四十年以上経過しているのだから、最早互いに『別の国』という意識の方が強いのだろう。各国の指導者はいずれも独立当時から世代交代しているのだから。とはいえ、誰も戦は望まぬ以上、何らかの妥協点を探るのだろう。いずれにしても、今の十一カ国体制が崩れて再び混乱の世となるか、余程強烈な魅力を持つ『帝の器を持つ者』が現れぬ限り、現在の膠着状態が動き出す可能性は薄いのではないか？」

「ところで、極州と離州については大体判りましたが、巽州ら三州についてはどうなのでしょう？ やはり同様の状況なのですか？」

「同様というか、難民となる事を決断した者の多くは極州に流れたのだから、そういう意味では比較的落ち着いているらしい。しかし、この三州は州侯の統治能力が減退していて、今では無法者の集団に占拠された町も少なくないのだそうだ。益州国や萃州国、そして東晶共和国にも、そういった無法者の侵入が度々あって、国境付近での小競り合いが絶えない状況だ。その辺の最新事情は治安部隊の方が詳しいだろうから、関心があれば、後で町役場へ行った帰りにでも治安部隊詰所に寄るといい。大まかな各国の状況はこの程度だが、何か質問はあるかね」

「いえ。ある程度の状況は掴めました。後は、随時情報収集に努める以外になさそうですね。そこで、少し話は変わりますが、東晶共和国について、もう少し詳しく教えていただけますか？」

「構わないが、どういった事だね？」

「東晶共和国は今までに無い新しい国家体制を敷いたと、昨日伺いましたが、具体的にはどういう事なのでしょう？ それから、大した事ではありませんが、李朝時代の通貨は金貨だったのに、今は紙のお金ですよ。李朝金貨に対する反応は頷けるにしても、他に何か理由があったのでしょうか？」

「なるほど。では、先に紙幣の方からお答えしよう。理由は簡単だよ。李朝時代に大量の資産が搾取されていて、当時の独立十二州各州は、通貨として新たに金貨を発行する程の金を保有していなかったのだよ。金以外にも様々な資産が枯渇していたし、大飢饉の影響も尾を引いていた。しかし、李朝から独立するのに、これまでの通貨を使い続けて、経済的には李朝の支配に屈すると言うのもおかしい話だろう。そこで、新たな通貨を発行する最も安上がりな方法が、金貨の代わりに紙幣を発行するという方法だった。結局は十二州が共同で圓と銭という新しい通貨単位を考案し、李朝時代の悪夢を払拭する通貨改革を行なったわけだ。それに伴い、李朝金貨もあらかた溶かされてしまった。だから、一部の奇特定の収集家の間では、李朝金貨が意外な高値で取引されているのだそうだ。もちろん、極州や離州では未だに李朝金貨が使われているのだろうが、こちらとは既に通商上の取引が無いから入手はほぼ不可能だろう。では、難民が持っているのではとも思いがちだが、そもそも金貨を手にする様な人々がわざわざ難民になる筈が無い……という事で、こちら側にはもう殆ど残っていないのだよ。それで、明日見の持っていた李朝金貨を、質屋は意外な高値で買い取ってくれたのだろう」

「単に必要なに迫られた苦肉の策だったのですね」

「紙幣そのものの価値はたかが知れているから、庶民が通貨を発行する政府を信用しなければ、紙幣など通貨として通用しないのだがね。そこが通貨である前に金だ……という金貨との根本的違いだったのだが、庶民は独立政府を信用した。それ程李朝に対する反感が強かった事の証明になる」

老師が傍らの湯飲み茶碗を再び口元に当て、すっかり冷めてしまった茶で喉を潤す。

「それから、東晶共和国の政治体制だが、これはそれまでの歴史上に無い壮大な実験とも言えるものだ。かつては中原が巨大な一国家であり、天帝の承認を受けた帝が国家の運営に責任を負うという形が長年続いて来た訳だが、我が東晶共和国の場合は庶民が国家の運営に責任を持つ。元首と呼ばれる、帝に代わる国家の指導者はいるのだが、天帝の承認を受けるのではなくて、庶民の承認を受ける事になる。五年に一度の国家元首信任選挙という儀式を通してだ。昨日も話した様に、この政治体制の原案を考えたのは撰晶なのだが、撰晶がその様な政治体制を考案した背景には、慧朝末期に政治改革に取り組んだ経験が元になっているらしい。撰晶の考察によれば、これまでの政治体制では国家の在り様全てを帝が定め、庶民は受身になるばかりで、一度帝の権威が地に落ちると脆い。しかし、庶民がより積極

的に政治に関与し、国家の運営に責任感を持つ様になれば、庶民は国家の発展を我が身の幸福と直結して捉え、国家の危機には共に耐え忍ぶ事を学ぶだろうと考えた。国家運営の任は帝が天帝から預かるものだが、撰晶は帝の直下に、庶民の信任を得た摂政を置き、実質的には庶民の代表が国家を運営するという、新しいスタイルの帝政を模索していた。最終的には帝が全責任を取るのだが、緊急事態でもない限り帝は飾り物で構わないという訳だ。昨日も話した様に、撰晶の構想は実らぬまま一族共々惨殺されるという憂き目を見た。しかし、そんな撰晶の理想に共鳴した慧朝時代の側近が何人もいて、また当時の過州州侯もその理想に理解を示す一人だった。後に十二州が李朝から独立した時も、過州州侯がむしろ率先して東晶共和国の成立に動いたのだからな。『我が過州が、かつて撰晶を州侯とした震州と共に、撰晶の理想国家を実現せん』とあって」

「撰晶の先進性はわかります。しかし、撰晶はあくまでもこれまでの帝政を前提としていました。一方、東晶共和国は帝政とは何のかかわりも無く、天帝との関係が途切れております。この様な国家がいつまでも繁栄を謳歌し続けられるのか、私には疑問です」

「実際に明日見の言う様な声も、当時からなかった訳ではない。しかし、同時に李帝の帝位継承に不信感を募らせていた諸侯には、『天帝も過ちを犯すものだ。完全ではない』と映ってしまった。事実、十二州の独立後一年も経たずに李朝は廃絶となったのだから、諸侯の目にも『天帝が自らの誤りを認めて李帝を罰した』と映った。そうであれば、同時に『独立の承認を得た』と考えても不思議ではあるまい。天下の大罪である誅殺を犯さずに李朝の圧制から逃れるにはこの方法しかなかったし、独立が禁じられている訳ではないのだから」

明日見には返す言葉が無かった。

これまで天帝の絶対を確信していたのだが、にわかに天帝に対する確信と信頼の砦が音を立てて崩れてゆくのを感じた。

確かに、老師の言うように、李朝時代の歴史を振り返れば、天帝が過ちを犯したと取られても仕方のない経緯を辿っている。

しかし、天帝がこれまでに過ちを犯した事なんて一度も無かったし、天帝でさえ過ちを犯すのなら、人は何を信じて生きればよいのだろう。

「もちろん、かつての国家体制とは根本的な違いがある以上、やってみなければ誰にも成否は判らぬのだから、いずれ何らかの報いを受けない保証は無い。しかし、現時点では概ねうまくいっている。人には未来を見通す力が備わっていない以上、現状と、自分の能力から未来を推し量る事しか出来ないのだよ」

老師が、傍らの湯飲み茶碗を口につけ、すっかり冷え切ってしまった茶の残りを飲み干した。

「少々早めだが、今日の講義はこれで終わりにしよう。私はもう一度茶を温めて、一服してから昼食の支度に取り掛かるが、明日見はどうするかね？」

「お茶は結構です。せっかくですから午後は町に出たいので、今のうちに洗濯を済ましてしまします」

「そうか。では、この籠に入っているのが慶太と私の衣服だから、お願いしますよ。洗濯桶と洗濯板は井戸の脇に置いてあるし、物干し竿の場所もわかるだろう？」

「はい」

明日見は立ち上がり、学習帖を片付けようと小屋を出掛けた時に、背中越しに老師が語りかける。

「東晶共和国の『共和国』の意味は、『民が共に手を携え、和を持って国の繁栄に尽くそう。それがひいては自分の幸せにもつながる』という意味合いなのだそう。もしこの国のあり方に疑問があるのなら、晶都（しょうと）を訪れると良い。あそこはわが国の首都であり、国家の中枢を担う組織が密集しているから、この国のありようを見極めるにはうってつけの場所だ。いって、自分の目で確かめなさい」

＊

明日見の目の前には、治安部隊詰所と同種の石材を積み重ねた、しかし治安部隊詰所よりは二回りも大きな建物が、周囲の木製家屋を圧倒する存在感を放ちつつ鎮座していた。

代峰老師の小屋から向かうと、街道の交差する十字路を越えて少々歩いた所にある。

建物の入り口脇には、『東晶共和国過州東辺町役場』と刻まれた木彫りの吊り看板が掲げられている。

「この町って、東辺（とうべ）町と言うのか……」

これまで明日見はこの町の名前等には全く気に掛けなかったし、代峰老師や慶太を含めたこの町の誰も町名を言わなかったから、明日見も今日初めて知る事になる。

入り口を抜けて建物に入ると、思いの外建物の奥行きがある事に驚かされた。

手前側には長椅子やテーブル、観葉植物等が整然と並べられており、数名の人が思い思いの姿勢で長椅子に腰掛けている。

その先には細い板で仕切られた受付口が五つ並んでおり、更にその脇の通路を通ると別の部屋へ抜けられる様だった。

明日見は書庫の場所が分からずに、しばらく入り口付近で立ち往生していると、役場の職員らしきおじさんが声をかけて来る。

「どういった御用でしょうか？」

「書庫があると聞いて伺ったのですが……」

「書庫は別館になりますので、一旦入り口を出ていただいて、右手にある木造の建物になります。詳しくは中の係員にお尋ね下さい」

おじさんは軽く会釈し、再び受付口の奥へ消えてゆく。

「ふうん。役場って、そんなに広いんだ」

明日見は物珍しそうにキョロキョロと辺りを見回しながら、一旦建物の外へ出る。

右手には……確かに木造建築が併設されていた。

同じ木造とはいえ、周辺の商店に比べるとかなり頑丈で豪華な作りに見える。

建物の中には、やはり書庫と言うだけあって、四本の書棚が建物の奥まで続いている様だった。

明日見は手前の受付口の係員に声をかける。

「あの、地図を見たいのですが」

「どの様な地図をお探でしょうか？」

係員は、多分明日見よりは少し年上の、落ち着いた感じの知的な女性だった。

「中原地帯全域の地図を見たいのですが」

「中原全域の地図ですか……少々お待ち下さい」

女性は一旦受付口の奥に下がり、何らかの調べ物をしている様だったが、しばらくして戻って来た。

「申し訳ありませんが、ただいま貸し出し中の様ですね。一応確認の為に書庫の方も見てみますか？」

「いえ、それでしたら結構です。ところで、書店に行けば売っているでしょうか？」

「そうですね。このご時世ですから、国外への旅行に行かれる方も余りおられないと思いますが、ここからでしたら十字路を越えてすぐの所に書店がありますから、お見えになってはいかがですか？」

「そうですか。ありがとうございます」

明日見は丁寧に会釈して書庫の建物を出る。

「それにしても、国外旅行に行く人が少ないのに、何で寄りに寄って貸し出し中なんだろう……」

明日見はそんな愚痴を小声で漏らしながら、再び十字路を越えて元来た方に戻ると、十字路からそれ程遠くない位置に書店の建物が慎ましく軒を構えていた。

先日、買い物に訪れた衣料品店の、ちょうど向かい側と言った位置だ。

しかし、先程役場の書庫を見たばかりだからか、書店は妙にみすばらしく、そして狭く感じた。

とりあえず店に入るなり、店員の親父に声をかける。

「あの、地図は置いてありますか？」

「地図はそこにあるだけだが」

明日見は親父の指し示した一角の書棚を物色するが、『東晶共和国西から東まで食べ歩き地図』とか、『東晶共和国名所旧跡案内地図』といったものばかりで、中原全域を掲載した地図は無さそうだった。

仕方なく、明日見は『細密東晶共和国地図携帯用』を一冊購入し、ついでに店の親父に本来の用件について尋ねる。

「中原全域の地図は無いのでしょうか？」

「うーん、この所国外は物騒だから、国外旅行する人も少なくなったし、需要の無い本は置いてないねえ。でも、どうしても欲しいというなら、中古で良ければ質屋を捜してみる手もあるがね」

「（質屋ね……）ありがとう」

しかし、またしても質屋に行く事になるとは……明日見は、全てを見透かした様な質屋の物言いを何となく苦手に感じていたから、少々気後れする部分があったのだが、今後中原全域を掲載した地図は必要になるのだから、手に入れられるうちに入手するに越した事は無い。

ふう。

軽くため息をつく、明日見は重い足取りで質屋の入り口を潜る。

先日倉庫を借りたと言っていたのは本当だったのか、この前と比べると少々荷物の量が減っていて、通路が広くなった様を感じる。

とはいえ、未だに半ば倉庫状態が解消されたとはお世辞にも言い難い。

「いらっしゃい。李朝金貨の事は教えてもらったか？」

質屋の店主は、やはり明日見の顔を覚えている様だ。

「ええ。ところで、中古で構わないのだけど、中原全域の地図は置いてありますか？」

「地図ねえ……見た通りの状況だからなあ。どこかに紛れていたとしても、今すぐ出すのは無理だなあ。少しずつ片付けちゃいるんだが、まあ、見ての通りだ。一応探しておくから、また気が向いたら寄ってくれよ」

「そう……ありがとう」

明日見が振り返るが、質屋が何かを思い出したと言った風に呼び止めた。

「あんた、明日見って言うんだろ？」

「そうだけど？」

明日見は質屋に自ら名乗ってはいない筈……と怪訝な顔をするが、質屋はニヤリと意味ありげな笑みを浮かべて言葉を継いだ。

「あんた、曾頓（そとん）と呆六（ほうろく）を散々痛い目に遭わせたんだって？」

「曾頓と呆六って？」

「歓楽街の方でたむろしているならず者の一味なんだが、覚えがあるだろう？」

明日見の頭には、先日町からの帰り道で突如襲い掛かってきた二人組の顔が浮かんでいた。

「ええ、でも、あれはあの二人が襲いかかって来た時に返り討ちにしただけなんだけど……どうしてそんな事を知っているの？」

「どうしてって、今町中の噂になってるぞ。慶太の所にいる明日見って子が曾頓と呆六を散々な目に遭わせて、それで曾頓と呆六が相当怒っているらしいとさ。武術の使い手だそうだが、彼奴らはどんな汚い手でも使ってくるから、身の回りに気をつけた方がいいぞ」

「そんな事を言われても、元々奴らがいけないのだし、そんな謂れのない逆恨みをされてもいい迷惑なんだけど、でも忠告ありがとう」

結局中原全域の地図は手に入らなかったのも、明日見の当初の目的は達成出来なかったが、代わりに意外な情報が手に入った事は明日見にとっては有益だった。

それにしても、明日見の立場に立てば、自分が明らかな被害者であるにも関わらず、如何にも明日見が加害者であるかの様な噂が広がる事は、内心面白くはなかった。

だが、同時に明日見が武術の使い手である噂が広まった為に、今後明日見自身が直接何らかの事件に巻き込まれる可能性は減少したとも言えるのだろう。

ただし、そうになると、現在身を寄せている代峰老師や慶太が、奴らの歪んだ感情の矛先となる可能性があるかも知れない。

午前中の講義の件もあったが、この件も治安部隊に相談した方がいいだろう……そう考えた明日見の足は、自然と十字路を横切って治安部隊詰所に向かっていった。

治安部隊の詰所を訪れるのはこれで二回目だが、やはり石積みの建物は周囲を覆う木造建築の店舗の並びにあって一際目立つ。

しかし、町役場の建物と比べればこじんまりしている分、前回訪れた時よりは見劣りする様にも感じた。

そんな事をぼんやり思い巡らせていた明日見の眼前に、突如山の様な巨体が現れて視界を塞ぐ。

「よう、慶太の所の明日見じゃねえか。どうした、今日は」

「源蔵さん。幾つか伺いたい事があって来たんだけど、時間はありますか？」

「すまんなあ。今から見回りなんだ。俺で無いと足りない用なら、見回りが終わるまで待ってもらるか、日を改めてもらうしかないが、そうでなければ隊長に聞いてもらえるか？」

「ありがとう。だったら、隊長さんに聞いてみる」

源蔵はすかさず詰所内に向けて『隊長！ こいつ、慶太の所の明日見の話聞いてやって下さい。では、見回り行って来ます』と叫び、再び明日見の方に向き直る。

「お前さん、例の二人を散々に叩きのめしたらしいな」

「だから、それは違うんだって……」

「まあ、奴らは執念深いから、気をつけるんだな」

と残して明日見の脇をすり抜けた源蔵は、そのまますたと見回りに出発してしまった。

治安部隊詰所の真ん前に一人取り残された明日見は、意を決して建物の中に入る。

その中には、慶太の憧れの的である公亮隊長がいる筈だった。

「失礼します」

「明日見さん、ですね。とりあえず座って下さい。お茶でも入れましょうか」

明日見の目に映った公亮隊長は、大男で豪快な雰囲気源蔵とは好対照の、若干小柄で低姿勢な気の良いおじさんといった感じの男だった。

慶太が憧れるくらいだから、もう少し凄みのある格好のいいタイプかと想像していた明日見だが、表情を始めとして全体に和やかな雰囲気を漂わせている一方、この人が治安部隊で大丈夫？ ……という懸念も感じさせる。

しかし、治安部隊の隊長を務めるくらいなのだから、かなり腕も立つのだろう。

「この様な所では、お茶と煎餅くらいしかありませんが、つまんでいって下さい。ところで、お話とは一体何でしょうか？」

「あの、公亮隊長ですよ。慶太に聞いていた話と雰囲気が違うものだから……」

「あはは。よく頼りなさ気だと言われるんですよ。これでも頑張っているのですが、あの源蔵さんと比べられると、どうしても見劣りがしてしまうのでしょうかねえ」

本当に笑顔を絶やさない、朗らかな人だ。

この人が本当に頼りになるのだろうか……と、心に一抹の不安を覚えながらも、思い切って明日見は切り出した。

「治安部隊は、全国各地に詰所があるのですよね？」

「ええ、全国殆どの町に詰所がありますし、過都と晶都にはそれぞれ治安部隊の州本部があります。といっても、晶都の州本部の方が偉いのですがね」

「そうしたら、国境付近の治安がどのような状態かは、お分かりになりますか？」

「ええ、各地の治安状況をまとめた週報という文書が発行されますから……一応内部文書なんですけど。それで、国境付近にいかれるのですか？」

「仕事上の都合で、国境付近に行く可能性がありますので、念の為に教えていただければと思ったのですが……」

「お仕事ですか、大変ですね。ただ、ご存知の様に、国境付近には難民が多数押し寄せておりますから、出来れば余り近づかない事をお勧めします」

「やはり、暴動が発生しているのですか？」

「いえ、他の国ではその様な事もあるみたいですが、幸いにもわが国の場合は難民を上手に扱っている様です。ただし、相手は難民ですから、いつ不満が爆発するかわかりません。本来ならば、極州や離州が不満の対象になる筈なのですが、難民は極州や離州に絶望しているのですから、どうしてもまだしも希望が持てるわが国や他の国々に不満の矛先が向いてしまいます」

「巽州側はどうでしょうか？」

「極州側に難民が集中してしまったので、巽州側には殆ど難民問題はありません。その代わりに治安が崩壊して、無法者の集団が度々国境を超えて略奪に来る様で、国境付近で治安部隊との小競り合いは頻繁にあるようです。軍隊の出動する場合もある様ですから、ただの強盗団とは規模が違うのでしょうか。現在はむしろこちらの方が危険なのかもしれません」

「そうですか。ありがとうございました。それから、もう一つは相談なのですが……」

明日見は、曾頓と呆六に関わるこれまでの経緯をかいつまんて説明する。

「……それで、曾頓と呆六はかなり怒っているそうなのですが、私はとにかく、代峰老師や慶太に危害が及んでは困りますので、何か良い方法はないかと思ひまして」

「うーん。それは困りましたねえ。私たちが警戒を強める事は出来ますが、それでは気休めにしかならないでしょう。老師や慶太君を始終警護する訳には行きませんし、かといってお二人に当分ここで生活して頂く訳にもいきません。当面は出来る限り一人きりにならない様に気をつけるしかないでしょう。それで様子を見ながら、その都度対応を協議しましょう。」

一応州本部にも事情を説明して、老師や慶太君を警護する人員を増員して貰える様に頼んでみましょう」

「では、よろしくお願いします。ところで、あの二人は一体こういった連中なのですか？」

「この前の道を、もう少し左側に行った辺りに歓楽街がありまして、そこで三軒の店を構えているならず者集団ですよ。十五人から二十人くらいいるのでしょうか。確か、『鼠と子猫亭』と『賭博人生』と『葡萄酒工房』と言う名前の店でしたね。殆どの町民から煙たがられてはいるのですが、反面『鼠と子猫亭』は割りと有名で、繁盛しているようです。幾らならず者といっても、私たち治安部隊も法に則って動きますから、明らかな犯罪行為でも無いと取り締まる訳にはいかないのです。世の中のすべてが善良な人々で無い以上は、一部にならず者が紛れてしまっても仕方がないのでしょうね」

「わかりました。相談に乗って頂いてありがとうございます。早速老師と慶太にも注意を促します」

「そうしてあげて下さい。それから、明日見さん、武術を余り簡単に使い過ぎると、いつか暴行罪に問われてしまうかも知れませんが、勢い余って人を殺めてしまう可能性もありますから、充分慎重にされた方が良いでしょう。私も明日見さんを見まわすべくはありますから」

「分かりました。ご忠告、感謝します」

＊

明日見は、川沿いの道を小走りで代峰老師の小屋に向かっていた。

先程治安部隊詰所で公亮隊長に相談した事もあったが、妙な胸騒ぎを感じていたからだ。

日はまだだいぶ高い位置にあったが、そろそろ西の空が赤みを増して来ている。

しかし、明日見の視界は老師の小屋のある方向に据えられたままだ。

時折、長く伸びた明日見の髪を撫でる風の中に、何かが焦げた様な異臭が混じる。

明日見の鼓動は早くなり、何か良からぬ気配を察知した足は、自然に全速力へと切り替わっていた。

そして、明日見の視界が、天に向かって濛々と立ち上り、風に煽られては周囲に拡散する煙を捉える。

その下にある筈の老師の小屋は、今まさに夕日よりも赤く激しい猛火を上げ、断末魔の悲鳴を吐きながら、生きながらに焼き尽くされようとしていた。

「老師！ 慶太！」

明日見は小屋を丸ごと飲み込む業火に負けまいと、口と鼻を手で覆って火の中に飛び込もうとするが、煙に燻されて瞼は開かず、周辺に舞い散る火の粉が新たな獲物に飛び掛らんと、容赦なく服や髪の毛に張り付いて、ちりちりと焦げていく。

窓の向こうでは火の嵐が出口を求めて猛り狂う姿が垣間見え、既に部屋の中にも炎が蔓延している事を悟った。

ふと、小屋から少し離れた井戸の脇に、何者かが倒れているのを明日見は見つけた。

代峰老師だ。

「老師！」

老師の衣服は所々焦げて黒ずみ、左腕と左足の皮膚が赤く焼け爛れていた。

「老師！　今手当てしますから」

明日見は老師の焼け爛れた患部に、掌を直接当てない程度に近づけて念を込めた。

少々の痛みや傷程度ならば、明日見の手当てでも充分過ぎる効果を発揮するのだが、火で焼け爛れた患部の治療は初めてだ。

しかし、今の明日見にはそれしか出来る事が無かったから、老師の患部の上をなぞる両手に全神経を集中し、一心に念を込めた。

「ううっ！」

老師の喉から低い唸り声が漏れ、微かに開いた瞼が明日見を捉えた。

「明日見……慶太を……慶太……」

「老師！」

老師のうめく様な弱々しい声を捉えた明日見は、手当てを中断して老師の口元に耳を近づける。

「ならず者……呆六が、火を……放った……」

「あいつが！」

明日見の脳裏に、先日明日見の放った石礫を額に受けて悶絶した呆六の姿がちらついた。

「明日見……慶太は、慶太は……」

「分かりません」

「慶太を、慶太を……探して……」

「でも、老師は？」

「構わぬ……」

「そんな！」

「慶太を……」

明日見は一瞬戸惑った。

老師の小屋がならず者の呆六に火を放たれ、慶太も行方不明では、慶太もならず者の曾頓か呆六の手に掛かった可能性はある。

慶太の身の上は気がかりだが、明日見の選択は第一に目の前で傷ついた老師に、しかるべき処置を施す事だった。

「老師、ちょっと痛いけど、我慢して」

明日見は、焼け爛れた患部がなるべく他に接触しない様に気遣いながら老師を抱え上げ、全速力で走った。

老師は痛みには堪え切れないのか、時々くぐもった呻き声を上げていたが、それでも瞼を硬く閉じ、奥歯を食いしばって痛みを耐えている様だ。

——間に合って、間に合って……。

明日見はひたすら念じながら、ただひたすら走った。

いつの間にかまなじりを涙が伝い、風に流されて細い筋を作る。

しかし、明日見は泣かなかった。

永遠とも思える半刻（約三十分）を、明日見は必死に念じながら走りぬけ、老師も身を引き千切られる痛みに耐えた。

森の木々の間を抜けた先には、かつて明日見が一度だけ迷い込んだ精三の丸太小屋があった。

「精三さん！ 精三さん！」

叫ぶ明日見の声に、お気に入りの明日見の訪問と、何か只ならぬ事態を察知した精三は、扉を開けるとまさに今日の前に現れた明日見と代峰老師の只ならぬ様子に、目を丸く見開いたまま立ちすくんでいた。

「精三さん！ 老師を、早く！」

しかし、明日見の叱咤する声に我に帰ると、精三は自分の寝台に明日見を導き、とりあえず老師の傷ついた体を寝台に横たえた。

「精三さん、私のお願いを聞いてくれる？」

「うん」

「私、これから慶太を探さなくちゃいけないの。もしかしたら、慶太が悪い奴に苛められているかも知れないから、助けなくちゃいけないの。わかる？」

「うん」

「老師が酷い怪我をしているのだけど、私のいない間に老師の看病をする人が必要なの。わかる？」

「うん」

「そうしたら、私が慶太を助けに行っている間に、精三さんは町のお医者さんと呼んできて、老師の具合を診て貰いたい。その後、慶太が戻って来るまで、老師を守って欲しいの」

「うん。俺、ろーし守る」

「ごめん。本当は、こんな事を精三さんには頼めないのだけど、今の私には精三さんしか頼れない……」

「あすみ、泣いてる？」

精三が心許無げな顔で明日見の顔を覗き込む。

「ごめん。泣いてないよ」

明日見は慌てて涙に濡れた瞼を服の袖で拭った。

「……明日見……」

背後で老師が息苦しそうに声を上げる。

明日見は先程と同じ様に、老師の口元に耳を近づける。

「書く物と紙を……」

明日見は精三に頼んでノートと鉛筆を持って来させた。

そして老師に鉛筆を握らせると、老師はぎこちない手つきだが、なるべく普段の自分の筆跡に似せて文字を書き綴る。

『かねてからの約束を果たされる様切に願う』とあり、老師の署名、更には『国立学術院 逍隆』と書かれていた。

「……明日見、慶太を連れて……、晶都へ行け……、この人物に……紙を、見せろ……」

「いえ、老師。慶太を連れて戻ってきます」

「……晶都へ……」

明日見はノート紙を一枚引き千切って、小さく折りたたんで隠しポケットの皮袋の中に押し込んだ。

「精三さん、私は行くね。老師をお医者さんに見せてあげて」

「うん」

「ちょっと屈んでくれる？」

精三が明日見の言葉に応じて背中を屈めると、明日見は精三の首に両腕を回してきつく抱きしめ、精三の耳元で小さく呟く。

「精三さん、無理なお願いしてごめんね」

「あすみ、ともだち。慶太、ともだち」

「そうだね。ありがとう」

明日見は腕を解くと、そのまま二度と振り返らずに、精三の丸太小屋を後にした。

夕日は、今まさに西の空の彼方に沈もうとし、まるで何事も無かったかの様に無限の天空の画布を赤く染め上げていた。

＊

日が落ちて、見る見る色の濃さを増していく空の元、今夜もひと時のほかない宴がそこで開かれるであろう歓楽街の一角に、未だ暗闇の中にひっそり佇む一軒の居酒屋があった。

看板には『鼠と子猫亭』とあり、前足でじゃれる猫と必死に避ける鼠の絵が描かれている。この店の象徴となる絵だ。

普段ならもうこの時間には煌々と明かりを輝かせて、気の早い客の一人や二人は訪れていてもおかしくは無い……そんな時間だった。

しかし、今日に限っては、この一角だけを暗黒の闇とが静寂が支配している。

とはいえ、人の気配が無い訳ではない。

七～八人の男が『鼠と子猫亭』の裏口付近に密集して、何か良からぬ相談を巡らしている。

「灰人（かいと）さん、こいつ、息はありますが気絶させられてます。侵入者ですね」

裏口脇に一人の男が寝かされており、その男の元に腰を落とした一人の男が、寝かされている男の状態を確認している様だった。

「侵入者か……わざわざ面倒な仕組みの警戒鈴を取り付けていたおかげで、すぐに侵入者に気づいたからな。鼠はまだ巣穴に隠れているだろう。一人は入り口に残り、後は二人組で店内の一斉搜索だ」

灰人と呼ばれた、この集団の首魁と思しき男の命令一下、他の男達は二人組になって『鼠と子猫亭』の店内に散った。

程なく店内のあちこちから灰人に向かって声が掛かる。

「居酒屋店内、異常ありません」

「賭博部屋、異常ありません」

「厨房、異常ありません」

「よし、後は倉庫だけだな。みんなそのまま倉庫に向かえ。ボクも行こう」

一旦それぞれの部屋に散った男達が無言で倉庫に向かう。

灰人が遅れて倉庫に姿を現した時には、既に搜索が始まっていた。

倉庫は、『鼠と子猫亭』の中ではもっとも広い空間を占めているばかりでなく、店に出される献立用の食材や、各種の酒樽、その他法に触れる副業に関係する品物などが無造作に置かれていたから、この店の中では最も隠れやすい場所ではあった。

しかし、反面出入り口が一ヶ所しかない為、出入り口を抑えられたまま一斉搜索されれば、絶対に逃れられない『鼠の巣穴』でもあった。

「絶対にこの部屋にいる筈だ。徹底的に探せ」

叱咤する灰人の機先を制する様に、酒樽の奥から男がそろそろと後ろを気にしながら漫ろ足で出てくる。

男の背後から伸びた腕が、しっかりと首の周りに巻きつき、男は呼吸が出来ないと言った風に口をパクパクと開いて必死に空気を吸い込もうとしている。

「おめーは……」

背後の影に向かって、初めてそう漏らしたのは、先日明日見を襲った曾頓だった。

「そうか、この女が明日見クンなのかい？ 曾頓クン」

灰人の問いかけに辛うじて曾頓は『はい』とだけ答えるが、既に灰人はその生返事を聞いていなかった。

「慶太をどこへやった？ この男がどうなってもいいの！」

明日見は思わず腕の力を込めてしまったのか、男は声にならぬ声を上げて悶えている。

「キミが明日見クンか……女だてらに武術を嗜むのだそうだね。曾頓クンが全く歯が立たないというのだから、大したものだよ。それにその気の強さと度胸には感服するが、これはキミにとって余り都合の良い手段ではない」

「どういう事だ？」

「キミはボクの店に不法侵入し、ボクの部下に暴力を加えた。幾らボクたちが治安部隊に睨まれているとはいえ、治安部隊がこの現場を抑えればどう判断するだろうねぇ、明日見クン。今ちょうど治安部隊を呼びに人をやっている所だから、何なら治安部隊の反応を試してみるかね？」

クッ……明日見は言葉に詰まるが、呆六が代峰老師の小屋に放火したのは事実なのだから、その様な強硬手段に出た以上、慶太は曾頓ら一味に囚われていると考えるのがスジだ。

「しかし、お前達の仲間の呆六は代峰老師の小屋に火を放って、老師の殺害を図ったのは事実だ。慶太もお前達に囚われているに決まっている」

明日見も負けじと、このまま強気で押し通すつもりだ。

が、灰人の方が更に一枚上手だった。

「ほう。どの様な証拠があって言うのかは判らないが、とにかく部下に暴力を加えるのは勘弁していただきたいものだ。ボクは暴力が嫌いなのでね、話し合いで解決しようじゃないか。もし、それでボク達が不審な動きを見せたら、その時はキミの武術ならどうとでもなるだろう。大体、今治安部隊がこの部屋に入ってくれば、キミは即刻犯罪者として治安部隊詰所の留置所に放り込まれる。そいつの首を折れば殺人犯だ。即刻死刑か、そうでなくとも強制労働三十年の刑は免れまい。キミにとってどうするのが得か、よく考えてみたまえ」

確かに、このままこの男の首を折っても、慶太が戻ってくる保証は無いのだ。

それでは明日見が一方的に犯罪者となるだけで、これまでのすべてが無に帰してしまう。

明日見は奥歯をかみ締め、不本意ながら腕を解いて男を開放した。

男はそのまま床に崩れ落ち、首を抑えて身悶えしている。

そこに、倉庫の入り口から更に四～五名の男が入ってきた。

「灰人さん、一体これは……」

「この前、曾頓クンと呆六クンを痛めつけてくれた、明日見クンだそうですよ」

「っだと！」

「まあまあ、そういきり立つな。こちらにはこちらの言い分はあるが、明日見クンにも明日見クンの言い分があるそうだから、ここはじっくりとお互いの立場について話し合おうじゃないか」

「しかし！」

「それとも、曾頓クンが全く歯の立たなかった明日見クンと、一対一のタイマン勝負でも試してみるかね？」

「うっ……」

その一言で、いきり立っていた男も押し黙ってしまった。

灰人といったか……この首魁は、ならず者どもの扱いをよく心得ている。

手強い。

明日見としても予想外の展開に、当面は様子を見つつ作戦を練り直すしかなさそうだ。

「では、話し合いと行こう。誰か、椅子を二脚もって来たまえ。ボクと、明日見クンにもだ。それから、葡萄酒を持ってきたまえ。枡も二つだ。ボクと、明日見クンに」

男達は、まるで灰人の操り人形ででもあるかのように、手早く二脚の椅子と葡萄酒、そして二つの枡を用意した。

二丈（約三メートル四十センチ）程の感覚を明けて二脚の椅子が用意され、早速灰人は部下から枡に並々と葡萄酒を注いでもらっている。

「明日見クンも、かけたまえ」

灰人に促されて明日見も椅子に腰掛けると、部下の男から枡を手渡され、並々と葡萄酒が注がれる。

「では、明日見クンとのお近づきの印に、そしてこの話し合いが良い方向で解決する事を願って、乾杯しよう。明日見クンは、葡萄酒は好きかね？」

「わからない。今日始めて飲む」

「そうかい。では、気に入ってくれる事を願うよ。乾杯だ」

灰人は枡を高く掲げ、そのまま一気に飲み干した。

灰人が葡萄酒を飲み干すのを確認すると、明日見も恐る恐る枡に口をつけ、舌で転がす様にして味わいながら飲み込む。

——葡萄酒って、結構美味しいかも……。

思った矢先に、明日見の意識は朦朧として、視界も奇妙に歪み始めて、眠る様に意識を失っていった。

「さすがは少量でも即効性がある。さあ、明日見クンの意識が覚める前に、さっさと椅子に固定したまえ」

途切れ途切れの意識の中で、そんな言葉が聞こえた様な気がする明日見だった。

*

明日見が軽い居眠りの様なウトウトした心地よい感覚から覚めると、手首と足首、そして腹部に縄の様な縛めの感触を感じ、更には口に何かが突っ込まれていて話す事が出来ない。

これは猿轡だろうか。

嵌められた。

明日見は直感した。

手足を動かそうとするが、相当硬く結わえてあるのか、びくとも動かない。

それどころか、血行不良の為に手先、足先が痺れている様な気がする。

明日見は灰人を睨みつけるが、灰人は全く意に介さぬと言った風に話し始めた。

「さて、話を始めようか、明日見クン。キミの探している慶太クンというガキだがね、既にここにはいない。奴隷商人に売り払ってしまったよ。キミはどう思うのかはわからないが、首都の方にはあのようなガキにご執心という紳士、淑女の方が意外に多くてね。きっと、あのガキもそういうご主人様の元で様々な如何わしい行為の相手をしながら、愛玩動物同様に何不自由なく暮らすのだろうねえ」

明日見も奴隷商人の話は聞いた事がある。

元々は、労働力確保の為に貧困家庭から二束三文で買い受けた子供を、ただ働きさせたのが始まりと言われている。

また、女性を騙して売春宿に売り飛ばす仲介人などもいて、それも奴隷商人のうちに含まれる。

しかし、奴隷商人は余りに人の尊厳を貶めているとして、遙か昔に違法行為となった筈だ。そんな奴隷商人が、この時代にも存在するというのだろうか。

「それから、治安部隊など幾ら待ってもこないから、安心してくれたまえ。大体、この倉庫には法に触れるかも知れない危険な品物を隠しているのね、自ら治安部隊を呼ぶなんて馬鹿な事をする訳がない」

灰人を睨みつけたままの明日見の視線が、心なしか鋭くなる。

この男は初めからこの脚本を想定した上で、あの様な出来た小芝居を打っていたのだ。

いや、むしろ灰人の言にまんまと乗せられた、明日見自身の甘さが原因なのかもしれない。

「本題はこれからだ。この中には既に話した連中もいるが、もう一度全員に話しておきたいと思う。先日、例の薬品の売買で巽州との州境まで行って来たのだが、巽州では今や州侯の権威も地に落ち、治安を維持する筈の各地方豪族も機能麻痺して、半ば無法地帯と化しているのだそうだ。向こうの首魁は既に三つの町を支配下に治め、現在四つ目を物色中だという。一度支配下におさめれば、豪族どもは滅多に手を出してくる事は無いのだそうだ。そういった集団が巽州だけで五つ以上、多分鼎州や夷州にもいるだろうという話だった。『俺の国』といていたよ。ここ、東晶共和国では望む事すら不可能だが、国境の向こうでは自分の才覚次第で『自分の国』が持てる。お前達も『俺の国』を持ちたいとは思わないか？」

「俺達の国？」

灰人の部下達はにわかに騒然となった。

これまでは、せいぜい過州の片田舎で威張り散らしたり、怪しい非合法の副業で手に入れたあぶく銭で馬鹿をやったり……と言う程度が限界だったならず者達が、自分の国を手に入れようというのである。

しかし、灰人は騒がしい部下を静めると、更に話を進めた。

「一度巽州へ渡れば、二度とこちらへは戻れなくなるだろう。もし、この町を離れたくないという者がいれば、店を一軒残しておいてやるから、今後は堅気の人間として、この町で骨を埋めればいい。しかし、ボクについてくるという者は、明日中に店を売り払って、即刻この町を出る。そして、巽州で『俺達の国』を作るんだ。向こうの首魁と共同戦線を張る段取りになっているから、当面必要な生活費と武器の調達費用さえ確保できれば、後は何とでもなる。そこでだ、この女、明日見クンを手土産に持っていこうと思うのだが、どうかね？」

それにはすかさず曾頓が、『灰人さん、こいつは俺が……』と異を唱える。

「曾頓クン。キミの悔しい気持ちはよく判る。それにキミは常々、気の強い女を組み従えるのが無上の喜びだといっていたねえ。今すぐにでも陵辱したいのだろう？　しかし、明日見クンはこの村の垢抜けない女共と違って、見ての通りの美形だ。女としての価値も高い。女一人で、『俺達の国』の基礎固めをする助力が得られれば、安いものだとは思わないかね？」

灰人は立ち上がり、曾頓に歩み寄る。

「一時的な感情で自分を見誤ってはいけない。曾頓クン、考えても見たまえ。『俺達の国』を手に入れば、女など選り取り見取りだ。明日見クンは確かにいい女だが、世界には明日見クンくらいの女は幾らでもいるとは思わないかね？」

灰人は、そのまま押し黙ってしまった曾頓の元を離れ、そのまま明日見の元に歩み寄る。

「しかし明日見クン、キミは本当にいい女だ。ボクはキミの事を気に入ってしまったのかも知れないよ」

首魁の手が突如明日見の胸元に伸び、服の上から豊かな乳房を鷲掴みにする。

明日見は虚をつかれて、思わず背中を屈めて灰人の手を払いのけようとしたが、所詮は無駄な抵抗に過ぎない。

両足首を椅子の足に固定され、腹部を椅子の背に固定され、両手首も後ろ手に縛られたまま椅子の背に固定されているのは、幾ら武術を巧みに使いこなす明日見といえども、なす術がない。

猿轡ごと奥歯をかみ締め、瞼を硬く閉じて、若干痛みの混じる胸元の不快な感触にじっと堪える。

「程よく柔らかくも張りがあって、しかも程よい大きさの胸」

灰人は明日見の乳房から手を離れたかと思うと、そのまま程よく括れた明日見のわき腹に手を這わせる。

「武術を嗜む割には、意外と筋肉が目立たず、滑らかにくびれた腹」

そのまま灰人は明日見の正面に回り、腰を落として猿轡越しに明日見の顔に鼻面を近づけ、不意に手を明日見の股間に這わせる。

明日見は反射的に腰を引こうとしたが、やはり先程と同様、所詮は無駄な足掻きでしかない。

股間でうねうねと蠢く灰人の人差し指と中指のもたらす不快感と、灰人のなすがままに任せざるを得ない屈辱感が、明日見の最後の気力をも潰えさせた。

明日見はいたたまれぬ嫌悪感と羞恥心に、思わず灰人から顔を背けてしまった。

「そして、ここは一体、何人の男を喰えたのだろうかねぇ。明日見クン？」

しかし、灰人はそのままあっさり手を引っ込め、元の椅子に座って明日見と対面する。

「こうして見ているだけで、ボクもキミを味見してみたくなるよ。今ここで裸に剥いて見たら、きっと明日見クンは綺麗だろうねぇ。しかし、このまま向こうのボスに手土産として引き渡すからこそ、明日見クンの女としての価値も上がるのだろう。きっと、キミは生娘なのだろうからね」

明日見は灰人の顔をまともに見る事が出来ずに、俯いたまま瞼を硬く閉じていた。

灰人の声も聞きたくは無かったが、全身を拘束されたままでは耳を塞ぐ事も叶わない。

「まあ、いずれにしてもそれは向こうの首魁に渡せば分かる事だ。さて、それでは、早いところ店を処分する目処をつけてしまおう。ボクは『葡萄酒工房』で待つから、お前達は今日は店を開けずに、店を買い取ってくれる相手を探すんだ。即金払いが条件だから、少々買い叩かれても構わない。それから、明日見クンには今夜はここで大人しくしてもらって、明日の朝までに荷車を用意させよう。明日の朝になったら、人通りが激しくなる前に、このまま荷車に運び込むとしよう。明日からの数日間は少々窮屈な旅になると思うが、我慢してくれたまえ。明日見クン」

既に意識が朧になっていた明日見の目尻には、微かに涙が浮かんでいた。

＊

明日見が目を覚ますと、薄暗い部屋の屋根から一筋の光が差し込んでいた。

——そういえば……。

明日見はおぼろげな意識の中で、昨日『鼠と子猫亭』に潜入した事を思い出した。

日が差しているのだから、きっと夜は明けているのだろう。

——という事は、ここは倉庫？

先程から日が差しているのは、倉庫の明かり取り用の窓らしい。

結局、明日見は椅子に拘束されたまま、一晚置き去りにされたのだった。

「明日見よ。とんだ災難だったのう。こうなる前にわしの忠告を信じて、あの老人や童を不用意に信用しなければ、この様な厄介な揉め事に巻き込まれなくてすんだのかも知れぬのう。ホルホル」

しかも、よりによってこんな時に、妙に聞き覚えのある嫌な声が、明日見の耳元に忍び寄る。

明日見は辛うじて自由に動く首だけを動かして、物の怪の位置を突き止めようと辺りを見回すが、全身の縛めが気になって意識を集中できない。

しばらくして、焦れた物の怪の方からわざわざ明日見の真正面に移動してきた。

「因果よのう。おぬしの考えはそのままわしに伝わるから、ただ頭に思い浮かべるだけでよい」

明日見の猿轡を見て察したのか、あの物の怪にしては今日はやけに気遣いが良い様だ。

とはいえ、それ以前に全身を拘束された姿を物の怪に見られる事が屈辱なのだが、これまでの物の怪の言を振り返ってもどうせすべて見られているのだから、その様な下らない意地を張る気も瞬時に萎えてしまった。

とにかく、この場は一刻も早くここを脱出しなくてはならない。

明日見は『その様に惚けている場合ではない。早く縄を解け！』と頭に思い浮かべる。

「おぬしの、そうやってすぐ人を頼る癖は改めねばいかんのう。そもそも、わしは物質に干渉する事は出来ぬのでな。残念ながらそれは叶わぬ」

——全く、いざと言う時に役に立たない……と明日見は内心想いつつ、『それならば、なぜこんな時に出てきた？』とぶつけてみる。

「こうして椅子に拘束されたり、あの男に体中を弄られたりと、嫌な思いもしたのじゃろうから、少しは薬が効いて、明日見が従順になったのではないかと思ったのじゃが、まだまだこの程度では効かぬようじゃの」

——何であんな嫌な事を思い出させる様な事言うのか……と、明日見は反射的に目を背ける。

一見これまでと違う態度を見せたような物の怪は、やはり今日になっていきなり心を入れ替える筈も無く、これまでと何も変わってはいなかった。

明日見は『その様な理由でわざわざ出てきたのか。お前のような不快感を撒き散らす物の怪に、これ以上付きまとわれるのは迷惑だ。さっさと失せろ！』と思い浮かべる。

「またその様に極端な事を言う。おぬし、このままではあのならず者の親玉の言う様に、無法地帯で性の慰み者として一生を終えねばならぬかも知れぬのじゃよ？ もっとも、観察する側としては、それはそれで愉しめるとは思うがの。キルキル」

この物の怪は、いつもそうやって戯れて他人の事を面白おかしく嘲っている……この様な苦境にある時に……他人事とはまさにこの事だ。

『所詮、お前もあのならず者達と同類だ。そうやって他人の人生を弄んで嘲っている、品性下劣な卑劣漢の一員なのだろう。人を単なる欲望のはけ口の対象物としか見ないような……』

わざわざ物の怪にぶつける文句を思い浮かべる度に、状況判断の甘さと冷静さの欠如を認識出来なかった自分の至らなさに対する後悔、現状を逃れる手段が見えない焦りと、今後自分に降りかかる運命に対するやり場の無い怒りと恐怖……そういった様々などす黒い感情がない交ぜになって、いつの間にか明日見の心の奥底から、濃い血の炎の塊となってふつふつと沸き上がっていた。

「それは違うのう。今し方、わしは物質には干渉出来ぬというたばかりではないか。それ以前に、わしは人間の性欲なぞには関心が無いのでな。それよりも、おぬしは普段からそう強気にしておるが、意外と脆さがある様な気がしての。もしこの先陵辱の限りを尽くされた衝撃で、おぬしの人格が崩壊する様な事があっては、わしも困るのじゃよ」

物の怪の言葉には心が感じられない。気持ちが竦っていない。

この様な状況に置かれているからこそ余計に、普段は然程気につけないような些細な事が、途轍もなく重大な関心事である様に感じられる。

そもそも相手は物の怪なのだから、初めから人と同じ心を持っている筈が無く、人と同じ様に気持ちを込める事が出来なくても当たり前なのだ。

しかし、それを思い起こさせる程の心の余裕を今の明日見に求めるのは、些か酷な要求だった。

一般庶民と比べれば特異な人生を歩んで来たとはいえ、また全身が凶器に変わる武術と言う心強い武器を抱えているとはいえ、明日見の人生経験はまだ余りに貧弱だった。

『ふん、今更そんな事を言っても無駄だ。私がどうなろうとお前には関係ないのだし、お前が困るかどうかなど、私の知った事ではない』

「まあ、そう自棄になるでない。おぬしも厄介な女子よのう。幾ら物事が自分の思い通りに運ばなかろうが、その責任をわしに押し付ければ解決する訳でもあるまい。そうやって己の身の不幸を嘆いていれば、いつか誰かが救い出してくれるなどと言う夢物語は、この世にはありえぬのじゃよ。『天は自らを助ける者を助ける』という言葉を知っておるか？ おぬし

が今やるべきなのは、その縄を解いてならず者どもから逃れる手段を考える事ではないのかのう。」

この実感の籠らない他人事丸出しの物言いは鼻に付くが、確かに物の怪の言に一理はある。

大体、ここはまだ中原でも比較的治安のよい東晶共和国の片田舎に過ぎない。

この先治安の悪化している諸国に足を踏み入れた場合、更なる無数の困難に遭遇する可能性だってあるのだ。

この程度の事態に一々動揺している様では、到底明日見に授けられた使命など果たせないだろう。

そして、明日見には挫折と言う選択肢は許されないのだ。

『天は自らを助ける者を助ける、か……物の怪にしては良い言葉を知っている。おかげで少し落ち着いてきた。確かにお前の言う様に、今はここを脱出する手段を考えるのが先決だ。とはいえ、全身を拘束されたままでは、実際の所手のうちようがない。しかし、奴らもこのままずっと私を拘束し続ける訳にも行くまい。好機は奴らが私の縛めを解いた時だ。それまでは苦痛だが、息を潜めてひたすら時期を窺うしかない』

「そうじゃの。……む？ あのならず者が近づいて来ておる。わしはこのまま一旦去るが、せいぜい奇跡が起こる事をおぬしの崇める天帝様にでも祈るがよい」

その言葉を残して、突如物の怪の姿は部屋に溶け込む様におぼろげになって、消えた。

程なく、明日見の耳にも、こつこつと徐々に大きくなって行く複数の足音が捉えられた。

継帝記異聞録 第一部 第一章 辺境 （了）

HP【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007【Blankfolder】こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記Blogでもお受けしております。